

Hokkaido University News

北大時報

平成30年

1

No. 766 January 2018

名和総長 年頭の挨拶

瀬川信久名誉教授が日本学士院会員に選定

第20回ソウル大学校-北海道大学ジョイントシンポジウムを開催



■ 年頭の挨拶

- 1 総長 名和 豊春

■ 全学ニュース

- 3 瀬川信久名誉教授が日本学士院会員に選定
5 大学入試センター試験の実施
6 第20回ソウル大学校-北海道大学ジョイントシンポジウムを開催
11 北大フロンティア基金
13 平成29年度補正予算（第1号）案等（本学関係分）の主要事項
13 株式会社北海道新聞社と包括連携協定を締結
14 中国科学院大学と大学間交流協定を締結 海外オフィスの設置について合意
14 イギリスの最先端の研究者2名による講演会を開催
15 平成29年度第1回HUCIフォーラム「大学の国際化に向けて」を開催
16 高等教育研修センターにて研修会を開催
17 「平成29年度冬山登山講習会」を開催
17 産学連携からベンチャー始動 海藻資源をビジネス化
18 ライフサイエンス系 新技術説明会を開催
19 ものづくり系 新技術説明会を開催
19 第1回食品産業エルム会 in 大阪「機能性食品セミナー」で講演
20 学生による社会企業のアイデアコンペ「ハルトプライズ」の学内選抜会を開催
21 人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで第33回「赤い糸会&緑の会」を開催

■ 部局ニュース

- 22 喜田 宏ユニバーシティプロフェッサー・名誉教授にタマサート大学（タイ）が名誉公衆衛生学博士号を授与
22 平成29年度 薬学部成績優秀賞授与式を挙行
23 観光学高等研究センター公開講座「デスティネーション・マネジメントと地域のこれから」が終了
24 スラブ・ユーラシア研究センター 2017年度冬期国際シンポジウム「ロシア革命と長い20世紀」開催
24 環境健康科学研究教育センターが環境と健康に関する市民講演会「これまでの成果と今後の展望～WHO研究協力センターとしての役割～」を開催
25 文学研究科で「LGBTフレンドリーなキャンパス作りのための教職員研修」を開催
26 教育学研究院でフォーラム「子どもの貧困を考える－北海道・札幌市における子どもの生活実態調査から－」を開催



スラブ・ユーラシア研究センター
2017年度冬期国際シンポジウム「ロシア革命と長い20世紀」



文学研究科
LGBTフレンドリーなキャンパス作りのための教職員研修



第20回ソウル大学校-北海道大学ジョイントシンポジウム



株式会社北海道新聞社と包括連携協定を締結

- 27 農学研究院で安全保障輸出管理FD・平成29年度第2回農学研究院FD研修会を開催
28 工学系部局で「第2回こころのケアに関する講習会」を開催
28 第12回医学研究院連携研究センター研究成果発表会を開催
29 低温科学研究所技術部で第7回技術部セミナーと第23回技術報告会を開催
29 生命科学院がアクティブラーニング形式の「Research Ethics Workshop for IGP students（研究倫理ワークショップ）」を開催
30 歯学研究院で自衛消防訓練を実施
30 附属図書館で「救命導入（AED）講習会」を開催
31 「院生・若手研究者のための英語論文執筆セミナー」を開催
31 北大元気プロジェクトのイベント開催に附属図書館が協力
32 総合博物館で生体展示「小さな小さなホ乳類 トウキョウガリネズミ」を開催
33 北海道大学病院で「第57回ふれあいコンサート クリスマスの夕べ」を実施
33 北海道大学病院が夕張市市民公開講座を開催
34 北極域研究センターが第4回北極域オープンセミナーを開催
34 北極域研究推進プロジェクト（ArCS）の国際シンポジウムを開催
35 突発災害防災・減災共同プロジェクト拠点が地域を守る防災技術者のリカレント教育に講師を派遣

■ 博士学位記授与 36

■ 諸会議の開催状況 38

■ 学内規程 39

■ 研修

- 40 平成29年度北海道地区国立大学法人等係長研修
40 平成29年度北海道地区国立大学法人等学生支援担当職員SD研修

■ 表敬訪問 41

■ 人事 41

- 42 新任教授紹介

■ 訃報

- 43 名誉教授 中路 貴彦 氏
44 名誉教授 田中 利光 氏
44 名誉教授 高橋 忠義 氏



附属図書館
北大元気プロジェクトのイベント開催に協力



北海道大学病院
第57回ふれあいコンサート クリスマスの夕べ

表紙：第33回「赤い糸会&緑の会」（関連記事21頁に掲載）

裏表紙：北の鉄道風景㊞ 札幌市電

年頭の挨拶

北海道大学総長 なわ とよはる
名和 豊春



新年明けましておめでとうございます。
新しい年を迎え、一言ご挨拶を申し上げます。

昨年4月の総長就任の際、所信表明で掲げたビジョンである「世界トップ100を目指す研究・教育拠点の構築」と「北海道の地域創生の先導」につきましては、理事・副学長をはじめ教職員の皆様と協働しながら積極的に様々な活動を展開した結果、①教育改革、②研究力強化、③国際化、④地域貢献、及び⑤ガバナンス改革の全ての項目において、一定の進捗を見ることができました。また、部局等の声に真摯に耳を傾けて、より民主的な運営に資するため、各部局等へお伺いし、本学の置かれている状況と今後のビジョンをご説明の上、多くの教員の皆さんと直接意見交換を行いました。その際にいただいた貴重なご意見等につきましてはしっかりと受け止め、今後、2つのビジョンに沿った新機軸事業を積極的に展開する中で提案に盛り込み、全学的な合意を得ながら実行に移していく所存です。

昨年は、①教育改革に関し、NITOBЕ教育システムの充実・強化、3つの国際大学院の設置、学部英語コースの開設、数理・データサイエンス教育研究センターの設置、九州大学との共同専攻の開設などを進められました。また、②研究力強化においては、URA事業の拡充を行い、国立研究開発法人物質・材料研究機構（NIMS）、JAグループ北海道、国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構や株式会社北海道新聞社との包括連携など、物質・材料科学や農林水産工学に関する先端研究を進める体制が構築されました。③国際化においては、ロシア及びインドとの世界展開力強化事業が新規採択されるなど、一定の成果を挙げることができましたし、「北海道の地域創生の先導」（④地域貢献）においても、ロバスト農林水産工学「科学技術先導研究会」が発足し、着実な進捗が見られました。

さらに、⑤ガバナンス改革に関しては、国内外の広報活

動の一元化（広報室）、研究・教育・国際・財務などの大学情報の一元管理と解析結果の経営への活用（総合IR室）、総長室体制の見直し（経営戦略室）、情報の共有化と民主的経営の推進（部局長等意見交換会、総長諮問委員会）のほか、外部資金等による新たなテニユア教員採用制度の創設等、積極的に取り組んでまいりました。また、スーパーグローバル大学等事業である「Hokkaidoユニバーサルキャンパス・イニシアチブ（HUCI）」においてもそれらの構想を着実に実施し、大学のグローバル化に向けた体制を堅固なものにすべく努めており、特に、申請の際の事前手続きにおいて、それまで学内の合意形成が必ずしも十分に図られていなかったことを見直し、新規の海外オフィス・リエゾンオフィスの開設、留学生の増加策、英語教育の普及策などについても、可能な限り全学的に検討を進められるようになりました。

しかし、ビジョンを達成するためには、今後、更なる努力が必要であると考えております。世界に目を向けますと、AIやビッグデータなど先端技術はめまぐるしい速度で進歩し、これに伴いグローバルな政治経済が根幹から変革する兆しが見えております。また、学術の世界でも革新の速度は劇的に増してきておりますし、人材を育成する教育の世界では、むしろ基礎学問の重要性を再確認し、それを土台にして、新たな視点や発想で物事を創造する教育が標榜されています。そこでは、政治、経済、歴史、文化・文芸、語学、数学、物理、化学、生物という基礎学問を修得する、いわゆるリベラルアーツと、それらを体系的に結びつけることのできる総合的なデザイン教育が大切であり、平成30年度中には数理・データサイエンスを加えた、リベラルアーツ型教養教育のアクションプランを策定したいと考えております。現在、新機軸事業の実施に向けた具体のロードマップである「HU（Hokkaido University）アクションプラン」を鋭意策定中でありますので、皆さんの合意を得た上で全学を挙げて取り組んでまいりたいと考え

ております。

平成30年度概算要求に関しましては、本学が打ち立てた北大近未来戦略150、すなわち、1) 様々な課題を解決する世界トップレベルの研究を推進する、2) 国際社会の発展に寄与する指導的・中核的な人材を育成する、3) 地域や社会の課題解決・活性化及び新たな価値の創造に貢献する地域や社会の知の拠点を形成する、4) 構成員が誇りと充実感を持って使命を遂行できる、持続的な発展を見据えた大学運営を行う、5) 戦略的な広報活動を通じて、教育研究の成果を積極的に発信し、世界に存在感を示すという戦略に沿って要求を行いました。昨年末に通達された内示では、総額は前年度と同額であるものの、新規予算はほとんどなく、多くの概算要求外の予算が基盤的経費に盛り込まれており、予想されたこととは言え、特にスーパーグローバル大学等事業では大変厳しい結果となっております。そのため、本学が目指す戦略と施策を着実に実施して目標を達成するとともに、外部評価を高めていくためには、これらの限られた予算の執行の在り方についても慎重に検討し、しっかりと管理していく必要があります。

本年4月には、新たな国際大学院が設置されますし、大学院課程の英語による授業科目を大幅に拡大するなど、今後も教育改革を進めてまいります。また、より多くの日本人学生を海外に派遣するため、文部科学省の「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」などの外部プログラムを積極的に活用していくことは勿論ですが、大学独自の海外派遣プログラムを充実・強化していくことも重要であると考えており、組織的に派遣学生数の拡大を図っていきます。さらに、グローバル化に対応した学生留学生宿舍の整備について、外部資金を活用した新たな取組も検討していきたいと考えており、ハード面においてもキャンパスのグローバル化を進め、研究・教育の一層の国際化を促進するための環境整備を図ります。また、高大連携の推進、入試制度の見直しなど改革の根幹を成す施策についても取り組んでまいります。

今後に向けては、「指定国立大学法人制度」をはじめ、「世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）」や「卓越大学院」を最優先課題に掲げ採択を目指してまいります。研究力強化の面では、創成研究機構を中心に、クロスアポイントメント制度を最大限に活用しながら、本学に優位性のある研究をさらに強化することにより、異分野融合研究、新たな学問領域の創成を図り、将来有望な若手研究者の育成を加速していきます。さらに、昨年採択された次世代アントレプレナー育成事業（EDGE-NEXT）を推進するとともに、「組織は人なり」を体現すべく、教員の配置計画を新たに策定し、教員の異分野交流を促す教員人事の実現を図っていきたくと考えております。

「北海道の地域創生の先導」を念頭に置いた地域連携・

社会貢献においては、まずは、「フードバレー構想」を着実に進めることが重要であり、北海道をはじめ道内の自治体や高等教育機関とも一層の連携を図りつつ、若者の地域定着を促進するという、新たな形で地域貢献を推進してまいります。

本年4月から、第3期中期目標期間の3年目がスタートします。北海道大学にとって大きな飛躍と同時に、今まで取り組んできた様々な挑戦や改革の成果を軌道に乗せる年といえます。そして、北海道の地に根ざした基幹総合大学として、「独立心と自律心を持った、豊かな北海道大学」の実現に向け、皆さんとともに歩んでまいります。

2018年が、教職員、学生、並びに同窓生の皆様にとって、実り多い年であることを願い、年頭の挨拶とさせていただきます。

新年交礼会の様子

1月4日（木）、名和総長の年頭の挨拶とともに、新年交礼会が始まりました。会場となった百年記念会館大会議室には、役員、部局長等が大勢集まりました。



乾杯の発声をする笠原正典理事・副学長

瀬川信久名誉教授が日本学士院会員に選定

本学の瀬川信久名誉教授（民法，現早稲田大学教授）が，平成29年12月12日（火）開催の日本学士院第1114回総会において，日本学士院会員（第1部（人文科学部門）第2分科（法学・政治学））として選定されました。

本学からは，平成23年選定の鈴木 章ユニバーシティプロフェッサー・名誉教授（有機化学）に続き，8人目となります。選定に際しての感想と功績等を紹介します。

（総務企画部広報課）



せ がわ のぶひさ
瀬川 信久 氏

感 想

このたびのことは，今日まで研究を継続したことに対するものであり，この間にお世話になった皆様に改めて感謝申し上げます。

研究者の道に進むことは私にとって自然な選択でしたが，法学には勉強し始めた当初，違和感がありました。修士論文をまとめ，判例研究等を書くうちにその違和感は少しずつ解消しましたが，法学の営みに対する不可視感が残っておりました。法解釈方法論に入り込んだり，法律論を支えている社会的事実を追いかけていたのは，法律論がしていることを自分なりにつかむためでした。振り返ると，それが民法学の基礎を明らかにする作業になったように思います。北大での35年間の最初の半分はそのような暗中模索の中におりましたが，そんな研究を見守っていただいたことを本当に有り難く思っております。研究会だけでなく日常的な会話の中でも，先生方から貴重なご教示や率直な意見をいただけたのは幸せなことでした。

法学の研究は，日本だけでなく諸外国の文献を基礎にします。膨大な書籍の受入・整理・閲覧の面倒をみてくださった図書職員の方々，その蔵書の収集体制を整えてくださった先輩の諸先生方に支えられた研究でした。特に私の研究は，上述のように民法学の少し外から手探りをする作業でしたので，法律以外の文献・資料を必要としました。1993年の借地法改正論議の中で，札幌をモデルとして明治以降の市街地の土地所有の変遷を示しましたが，その際に文系学部のほか農学部や工学部の蔵書を利用させていただいたこと，知らない資料の存在を幾度か教えていただいたことを思い出します。

独立行政法人化から10数年経ち，大学は今また難しい状況に置かれています。大変なご苦労が続くと思いますが，基本は切磋琢磨することで学術研究の意義を示すほかにないように思います。私もそのような気持ちを持ち続けたいと考えております。

功績等

瀬川信久名誉教授は，民法学の分野において，卓抜した著書と多数の論文及び判例研究等を発表し，学界の発展に顕著な貢献をしてきました。

第1に，『不動産附合法の研究』（有斐閣，1981年）では，古くから議論が錯綜していた付合制度について，紛争当事者と争われている利益に基づいて事案を類型化した上，この法制度の歴史的な変転を，社会的な背景に着目しつつ，フランス法とドイツ法との対抗関係の中で位置づけ，法概念と法解釈の社会的意味を具体的な制度に即して明らかにして，あるべき解釈論を提示しました。狭い意味での法学者の枠を超えたこの秀作は，後進が範とすべき「古典的な作品」として深甚なる影響を与えています。

第2に，『日本の借地』（有斐閣，1995年）では，それまでの法学と経済学が借地問題を地主と借地人との対抗関係ととらえたり，あるいは土地賃貸借市場の問題としてのみ把握していたのに対し，都市の諸資源の配分問題という広いパースペクティブの中で位置づけ，さらに土地賃貸借市場を土地売買市場や金融市場と連動させて検討することで，借地が減少した原因は借地法規制によるものではなく，第1次都市化の終了による地価上昇率の低下と社会的余剰資金の増加による借入金利の低下，そして，これと併行して生じた地代収益率の低下に基づくものであることを周到な実態調査によって実証的に解明し，その上で，借地法規制の方向性を提示しました。この画期的で希有な労作は，東京市政調査会「藤田賞」と日本不動産学会著作賞を受賞しています。

第3に，このように常に「歴史」と「社会」に裏打ちされた研究方法を，金融法，消費者法，不法行為法といった分野にも推し及ぼし，それぞれの領域の研究水準を一気に向上させるとともに，法解釈の基礎となる方法論に関する考察を深め，実作をもってその姿を示しました。

このように，同氏の研究は，現実の具体的な問題（紛争・判例・法制度）から出発して，紛争の背景と，それらの判例・学説・法概念はいかなる法（学史）的な環境の下で，どのような解決を目指すものであるかを歴史的・社会

的に究明し、その成果を踏まえた上で法解釈を提示しています。この先駆的で、かつ、求道者的な研究は、とりわけ研究者の間で格段に高く評価され、同氏は、民法学界だけでなく、法学界全体を代表する第一人者とされています。

略 歴

生 年 月 日	昭和22年12月22日
昭和46年 6 月	東京大学法学部卒業
昭和46年10月	司法試験合格
昭和48年 3 月	東京大学大学院法学政治学研究科民刑事法専攻修士課程修了
昭和48年 4 月	東京大学法学部助手
昭和51年 7 月	北海道大学法学部助教授
昭和56年10月	パリ第2大学留学
昭和58年 7 月	
昭和60年 7 月	北海道大学法学部教授
昭和61年 6 月	法学博士（東京大学）
平成12年 4 月	北海道大学大学院法学研究科教授
平成16年 4 月	北海道大学法科大学院長
平成18年 3 月	
平成16年 4 月	北海道大学大学院法学研究科副研究科長
平成18年12月	
平成16年12月	北海道大学教育研究評議会評議員代理
平成18年 3 月	
平成18年 4 月	北海道大学教育研究評議会評議員
平成18年12月	
平成18年12月	北海道大学大学院法学研究科長・法学部長
平成20年12月	
平成23年 3 月	北海道大学定年退職
平成23年 4 月	北海道大学名誉教授，早稲田大学大学院法務研究科教授

（法学研究科・法学部）

大学入試センター試験の実施

平成30年度の大学入試センター試験が、1月13日（土）・14日（日）の両日、全国一斉に実施されました。

本学においても、大学入試センター試験実施体制により、実施本部、総務部、試験場部、救急医療部、連絡部及び広報部を設置し、本学教職員等延べ

約1,300人の協力を得て、平穩のうちに終了しました。

全国の志願者は、前年度より6,704人増加し582,671人でした。道内の志願者は、前年度より187人減少し18,398人となりました。

本学が担当する試験場（藤女子大学

試験場を含む）の志願者数は、昨年より44人少ない5,347人で、各試験場（会場）の受験状況は次のとおりです。

（学務部入試課）

平成30年度大学入試センター試験受験状況

日 程 教 科 試験場（会場）名・志願者数		1月13日（土）										1月14日（日）							
		地理歴史、公民		国語		外国語 【筆記】		英語 【リスニング】		英語 【リスニング】 再聞テスト		理科①		数学①		数学②		理科②	
		受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	辞退者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数
北海道大学試験場	農学部会場	652	643	9	643	9	644	8	644	8		0	652	644	8	644	8	643	9
	人文・社会科学総合教育研究棟会場	779	737	42	739	40	742	37	738	41		2	777	726	53	723	56	720	59
	理学部会場	379	123	256	269	110	316	63	272	107		217	162	319	60	234	145	177	202
	工学部会場	663	487	176	584	79	585	78	554	109		348	315	413	250	300	363	241	422
	高等教育推進機構A会場	708	586	122	594	114	580	128	523	185		91	617	130	578	47	661	0	708
	高等教育推進機構B会場	857	819	38	824	33	824	33	814	43		740	117	754	103	733	124	0	857
	保健科学研究所会場	439	376	63	398	41	413	26	403	36		296	143	361	78	346	93	60	379
	高等教育推進機構N会場	15	12	3	12	3	12	3	11	4		4	11	10	5	9	6	5	10
藤女子大学試験場		500	322	178	444	56	449	51	439	61		383	117	399	101	286	214	0	500
札幌地区 小計		4,992	4,105	887	4,507	485	4,565	427	4,398	594		2,081	2,911	3,756	1,236	3,322	1,670	1,846	3,146
			82.2%	17.8%	90.3%	9.7%	91.4%	8.6%	88.1%	11.9%		41.7%	58.3%	75.2%	24.8%	66.5%	33.5%	37.0%	63.0%
北海道大学水産学部試験場		355	311	44	322	33	328	27	328	27		58	297	327	28	323	32	311	44
合 計		5,347	4,416	931	4,829	518	4,893	454	4,726	621		2,139	3,208	4,083	1,264	3,645	1,702	2,157	3,190
			82.6%	17.4%	90.3%	9.7%	91.5%	8.5%	88.4%	11.6%		40.0%	60.0%	76.4%	23.6%	68.2%	31.8%	40.3%	59.7%

※欠席した者には当該教科を「受験しない」と申請し登録していない者も含まれる



受験風景

第20回ソウル大学校-北海道大学ジョイントシンポジウムを開催

11月16日（木）・17日（金）に、韓国ソウル大学校と本学のジョイントシンポジウムを開催しました。両大学の合同シンポジウムは、平成10年より毎年交互にホスト校となる形で開催しています。

第20回となった本シンポジウムは、例年開催してきた全体会こそないものの、20周年を記念して特別フォーラムが開催され、また16日（木）開催の歓

迎レセプションでは、ソウル大学校のNak-in SUNG学長から、20年に至った旧交を深め、研究交流を発展させることで世界を昨日よりも良くすることに繋がるという挨拶がありました。本学の名和豊春総長からは総長就任の年に20周年記念の開催となることについての感慨と、今後の発展への期待が寄せられました。複数分科会からの参加者を含め、両大学の関係者がソウル大学

校音楽大学国楽科の学生による演奏を楽しみました。

今年度は6部局から8分科会がソウル大学校冠岳キャンパスを主会場として催され、両大学及び他校から約100名が参加しました。

（国際部国際連携課）



歓迎レセプション風景



名和総長の挨拶

特別フォーラム

Special Forum: University's Role in Mega Sports Events

メガスポーツイベントにおける大学の役割／国際連携機構長 笠原正典

11月17日（金）に、ソウル大学校平昌キャンパスのグリーンバイオ科学技術研究院で、両大学を代表する講演者らによるジョイントシンポジウム事業20周年を記念する特別フォーラムが開催されました。

平成29年2月には札幌で冬季アジア大会が開催されましたが、本年2月には奇しくも韓国側で平昌オリンピック・パラリンピック冬季競技会が開催されます。この幸運な偶然を鑑み、「メガスポーツイベントにおける大学の役割」というテーマに基づき、ソウル大学校Geun LEE国際担当副学長の発案により特別フォーラムを開催する運びとなりました。会場には、ソウル大学校平昌キャンパスにあるグリーンバイオ科学技術研究院が使用され、特別フォーラム前には平昌オリンピック・パラリンピック冬季競技会の会場

を視察し、同イベント組織委員会の案内に沿って、建設中の施設を歩き回りました。

講演者には、本学教育学研究院から山崎貴史助教授、保健科学研究院から遠山晴一教授、寒川美奈准教授、観光学高等研究センターから遠藤 正客員准教授が参加し、それぞれ、大学における障害者スポーツ、「前十字靭帯（ACL）スタディグループ」の会員連携によるナショナルチームのメディカルサポー

ト構築の可能性、メガスポーツイベントでの選手ケア、札幌オリンピック誘致に係るスキー観光の活用ケースを紹介しました。ソウル大学校側は師範大学のJoonHo KANG教授・スポーツ産業センター長がオリンピックにおけるスポーツ関連、非スポーツ関連の遺産について、同大学YuKyoun KIM准教授が漫画に見るスポーツの意義と経済的効果に囚われず、楽しさを共有する機会として捉えることについて、ま



平昌五輪会場査察



参加風景

た、グリーンバイオ科学技術研究院のTaeYoon KIM助教がグリーンでエコな大会運営とそれをういたバイオ技術普及について講演を行いました。

異分野融合の特別フォーラムでは、スポーツイベントという観点でスポーツマネジメントのみならず、観光、教育、スポーツ医学、農業という幅広い分野で事例を紹介し合う機会となり、20年続くジョイントシンポジウムを通じた連携強化の可能性が広がっていることが示されました。

い分野で事例を紹介し合う機会となり、20年続くジョイントシンポジウムを通じた連携強化の可能性が広がっていることが示されました。

【講演タイトル】

1. 北海道大学 教育学研究院 山崎貴史助教
Focusing on Daily Sport Practice for People with Disabilities in Japan
(日本における障害者スポーツの日常的実践に着目して)
2. 北海道大学 保健科学研究院 遠山晴一教授
Medical Support through Academic Network 'ACL Study Group'
(アカデミックネットワーク「前十字靱帯 (ACL) スタディグループ」によるメディカルサポート)
3. 北海道大学 保健科学研究院 寒川美奈准教授
Physical Therapy Services for Mega Sports Events
(メガスポーツイベントにおける理学療法サービス)
4. 北海道大学 観光学高等研究センター 遠藤 正客員准教授
Towards Further Winter Sports Promotion: A Case Study of Ski and Tourism in Hokkaido and Sapporo City
(冬季スポーツの更なる振興を目指して：北海道と札幌市におけるスキーと観光の事例から)
5. ソウル大学校 師範大学 JoonHo KANG教授
Legacy Development for 2018 PyeongChang Olympic Winter Games
(2018年平昌オリンピック冬季競技大会の遺産開発)
6. ソウル大学校 バイオ科学技術研究院 Taeyoon KIM助教
PyeongChang 2018 and Agriculture
(平昌2018と農業)
7. ソウル大学校 師範大学 Yookyoun KIM准教授
PyeongChang Olympic for Youth & Future
(若者と未来のための平昌オリンピック)

分科会2

2017 International Workshop on New Frontiers in Convergence Science and Technology

2017複合領域科学及び技術に関する国際ワークショップ／情報科学研究科 教授 平田 拓

ソウル大学校Graduate School of Convergence Science and Technology (GSCST) と情報科学研究科がカウンターパートとなり、ジョイントシンポジウムの分科会を11月24日（金）にソウル大学校GSCSTで開催しました。今回は、情報科学研究科から教員4名がソウル大学校を訪問しました。分科会に先立ち、GSCSTのSang Eun KIM研究科長を表敬訪問し、村山明宏情報科学副研究科長より今回のジョイントシンポジウムに関してお礼を述べました。KIM研究科長からは、共同研究や交流の端緒となることを期待してい

る旨が話されました。

分科会では、本学から4名、ソウル大学校から5名の教員が30分の講演を行いました。3つのセッションに分け、それぞれ近い分野のメンバーが講演を行いました（セッション1はバイオメディカル計測、セッション2はICT、セッション3はナノテクノロジー）。分科会の参加者は、ソウル大学校の教員10名、大学院生約30名でした。ソウル大学校GSCSTは、ナノテクノロジー、ICT、バイオテクノロジーの分野に力を入れています。分科会の講演の後、新たに研究の交流を進

める具体的な提案があり、学生の派遣や共同研究について意見交換しました。次回は本学で再会することを誓い分科会の行事を終了しました。



ソウル大学校GSCST KIM研究科長訪問時の集合写真

分科会3

The 12th Japan-Korea International Symposium in Ophthalmology

第12回日韓眼科シンポジウム／医学研究院 診療准教授 南場研一

11月18日（土）・19（日）に第12回日韓眼科シンポジウムがソウル市内のCourtyard Marriott Seoul Times Squareで行われ、本学からは南場研一診療准教授と鈴木佳代医師が参加しました。18日（土）には懇親会が行われ、それぞれの医療関係の変化などについて意見交換ができました。19日（日）は午前中からシンポジウムが開催され、ソウル大学Hyeong Gon YU教授による開会の挨拶の後、本学から

2演題、ソウル大学から4演題の講演があり、講演ごとに活発な意見交換が行われました。また、難治例について2症例が提示され、その診断、治療方針について討論されました。それぞれの若い医師が闊達に意見交換することができ、有意義なシンポジウムとなりました。

来年は札幌にて第13回日韓眼科シンポジウムを行う予定ですが、台湾長庚大学の先生もお招きする予定です。



参加者による記念撮影

分科会4

2017 SNU-HU-NTNU-KU Joint Symposium for Science Education – New perspectives on educational research and practice for the knowledge society

2017 SNU-HU-NTNU-KU理科教育ジョイントシンポジウム：知識型社会のための教育研究と実践に関する新しい視点／教育学研究院 教授 大野栄三

12月18日（月）～20日（水）の日程で本学を会場に実施し、今年も、台湾師範大学（NTNU）、カセサート大学（KU）を加えた4大学のジョイントシンポジウムになりました。

18日（月）は、ソウル大学校の大学院生8名、カセサート大学の大学院生4名と教員1名が、市立札幌開成中等教育学校の理科授業を参観しました。19日（火）・20日（水）の分科会には、4大学から教員8名、大学院生17名が参加しました。理科教育における「対話的学びの分析」「探究活動と教師の専門性」「科学の最前線と新しいカリキュラム」「マイノリティー」「イ

ンフォーマル教育」「ICT機器を活用した研究と実践」「アジア諸国のカリキュラムの比較研究」といった多彩なテーマで、23件の口頭発表があり、活発な議論が展開されました。19日（火）

の午後は、総合博物館を博物館の方の案内で見学しました。平成28年にリニューアルされた館内に、皆感嘆していました。平成30年は台湾で11月に開催する予定です。



分科会風景



集合写真

分科会5

Infection and Immunity – from the Basic to Applied

感染と免疫―基礎から応用まで／獣医学研究院長 堀内基広

本分科会は、11月16日（木）にソウル大学校獣医科大学のBiotech Research Bldg.において開催されました。ソウル大学校のJe Kyung SEONG教授が司会を務め、ソウル大学校獣医学部長のHee Jong WOO教授からの開会の挨拶で始まりました。シンポジウムでは、本学から4名、ソウル大学校から5名の計9名の教員が講演を行い、最先端の獣医学研究及びその応用・展開について議論するとともに、両大学の獣医学教育国際認証取得への取り組みに関する進捗状況について情報交換を行いました。閉会にあたっては、本学獣医学研究院長の堀内基広教授から挨拶がありました。また、本シンポジウ

ム開催翌日に開院記念式典が予定されていた新附属動物病院の案内が行われ、ソウル大学校の最新の獣医療施設を見学しました。シンポジウム後の懇親会では、今後の開催方法等について意見を交換しました。



堀内研究院長による講演の様子

来年度以降は、学部生や大学院生による発表等も視野に入れ、引き続き最先端の獣医学研究をトピックに取り組んでいく予定です。本分科会の開催にあたりご尽力をいただいた両大学の皆様に、心よりお礼申し上げます。



全講演終了後の参加者の集合写真

分科会6

Sociological Reflections on Current Issues in East Asia

東アジアの社会的課題と社会学的思索／文学研究科 教授 櫻井義秀

12月9日（土）、ソウル大学校の社会科学研究所にて「東アジアの社会的課題と社会学的思索」と題したワークショップが開催され、ソウル大学校社会科学のスタッフと、本学から文学研究科の櫻井義秀教授、村松正隆准教授、カローラ・ホメリヒ准教授（代読）、経済学研究院から橋本 努教授が参加しました。ソウル大学校側は、「韓国の若者の夢資本」「日韓の原理的発電と社会運動の比較」「朴正熙政権時のサバイバル権威主義体制」、本

学側は「医療化された死生とウェルビーイング」「日本の中流意識の緩やかな終焉」「経済倫理と社会問題における理念型」「中江兆民の道徳的自由主義と諧謔精神」と題した発表を行い、有益な討議がなされました。

今回は第5回目のワークショップになりますが、社会的課題・発想の差違についても相互理解がかなり進められ、将来的な出版や共同研究プロジェクト、大学院生相互の交流なども視野に収めた一層の交流の進展が約束され

ました。研究・教育の促進を促すための経費支援としては極めて効率的であることは付言できるでしょう。



集合写真

分科会8

The 6th HU-SNU Joint Symposium on Materials Science and Engineering: Recent Progress on Microstructure-Process-Property Relationship in Minerals

第6回材料科学に関する合同シンポジウム：材料における微細構造加工特性関係の進展／工学研究院 教授 橋本直幸

本シンポジウムは、ソウル大学校の Youngwoon KIM教授のご協力のもと、本学工学研究院材料科学専攻とソウル大学校工科大学材料工学科との間で開始され、3回目よりHeung Nam HAN教授を窓口とし、本年度は11月25日（土）にソウル大学校工科大学材料工学科棟内会議室において開催されました。ソウル大学校・本学双方から計14名の教授・准教授・助教・博士にソウル大学校の大学院生10数名を加えた計30名弱の参加者数となり、先生方

から材料科学に関する最新の研究が紹介されました。今回のテーマは昨年に引き続き、“Microstructure-Property Relationship in Materials（材料における微細組織と特性の関係）”であり、各専門家からの発表範囲は幅広く、個々の専門を超えて活発かつ有意義な討論が行われました。特に、エネルギー関連材料や材料計算科学分野における研究に関心が高く、共同研究を含めた交流につながる可能性が高まっています。また、大学院博士課程学生

による口頭発表も行われ、若手研究者の育成に多少なりとも貢献ができたと言えます。

今年度は、本学学生2名がインターンシッププログラムを通してソウル大学校を1か月間訪問する予定であり、今後も、学生間の交流を積極的に進める方向で一致しました。次年度は、本学でシンポジウムを開催する予定です。



参加者集合写真



橋本教授による講演



HAN教授による講演

分科会9

5th SNUH-HUH-SHH Joint Symposium

第5回北海道大学病院－ソウル大学校病院ジョイントシンポジウム／北海道大学病院長 實金清博

11月23日（木・祝）に、ソウル大学校病院がん病院講堂において「第5回北海道大学病院－ソウル大学校病院ジョイントシンポジウム」を開催しました。今回も昨年に引き続き、本院と部局間交流協定を締結している台北医学大学双和病院が特別参加しました。

分科会はソウル大学校病院 Chang-Suk SUH病院長、本院 實金清博病院長による挨拶で始まり、「Emergency Medicine（最先端の救急医療）」のテーマのもと、「Advances of EMS in Asia（アジアにおける救急医療の進

歩）」「Recent updates of cardiac arrest and stroke（心停止と脳卒中に関する最近の動向）」「Other aspects of emergency medicine ; Database, Transport and Mass Casualty（救急医療に関するその他のトピックス）」と題した3つのセッションから構成されました。3大学から多数の教員、医療関係者等の参加があり、各セッションの終わりには各大学での特徴的な取り組みを踏まえた活発な質疑応答、意見交換が行われ、盛会のうちに閉会しました。

今後も両大学病院間の連携強化のみ

ならず、3大学間の緊密なネットワーク構築によるさらなる発展が期待されます。



分科会参加者による集合写真

※分科会1「協力講義：環境化学物質と人々の健康」は、平成29年度ラーニングサテライト事業としても開催のため、北大時報12月号に掲載済。

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を發揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報

基金累計額（12月31日現在）

21,666件 4,314,057,039円

12月のご寄附状況

法人等14社、個人742名の方々から34,717,058円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名、銘板の掲示、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

医療法人 溪和会 江別病院、医療法人 溪仁会、寺田医院、日本赤十字社病院長連盟 北海道ブロック会、
パシフィックシステム株式会社、医療法人社団 ふるや内科、北大剣友会、医療法人 彰和会 北海道消化器科病院、
一般財団法人 北海道青少年科学文化財団、北海道大学東京同窓会

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	朝倉 充	浅野 賢二	浅野 孝	阿部 茂	阿部 弘	有本 卓郎	石渡 英夫
入澤 秀次	岩下 明裕	蝦名 康彦	大河原 章	大久保盛厚	大森 和広	岡野 哲	奥野 和弘
奥野 陽子	小熊 豊	尾崎 渉	小谷 晃司	小内 透	小原 大和	埴山 雅秀	金川 眞行
河本 充司	鬼頭 康之	黒田 竜男	黒田 練介	小林 克彦	小松 寿幸	小守林 訓	斉藤 久
齋藤 令子	坂本 信行	佐久間一郎	櫻木 範明	佐々木俊夫	佐野 公昭	猿渡 照夫	三升畑元基
七戸 俊明	品田 恵佐	渋谷 正人	清水 研一	下川部雅英	白倉 光子	城田 昌良	瀬名波栄潤
千田 公男	高木 俊充	竹内 薫	谷 友一郎	津田 栄継	土家 琢磨	鶴田 靖	寺澤 睦
豊田 威信	長尾 敬志	長岡 宗男	長島 健一	名和 豊春	西村 正治	野海 清志	野村 修一
橋本 秀夫	長谷川 敦	花井 秀勝	原 誠	平井 喜郎	古谷健太郎	村上 明	八木 知徳
安延 義弘	吉岡 正俊	吉崎 正人	吉田 珠美	吉田 広志			

銘板の掲示（20万円以上のご寄附）

（法人等）

医療法人 溪和会 江別病院、日本赤十字社病院長連盟 北海道ブロック会、パシフィックシステム株式会社、
医療法人社団 ふるや内科、医療法人 彰和会 北海道消化器科病院

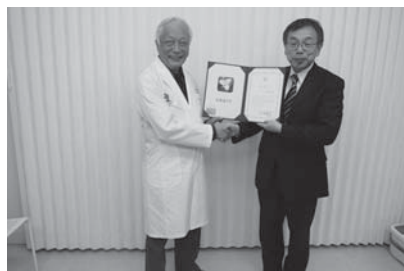
（個人）

浅野 孝、阿部 弘、大久保盛厚、大森 和広、小谷 晃司、黒田 練介、猿渡 照夫、品田 恵佐、竹内 薫、
谷 友一郎、西村 正治、長谷川 敦、原 誠、古谷健太郎、八木 知徳

感謝状の贈呈



株式会社ツルハ 様（平成29年12月14日）



加藤 元 様（平成29年12月22日）



数士文夫 様（平成29年12月22日）

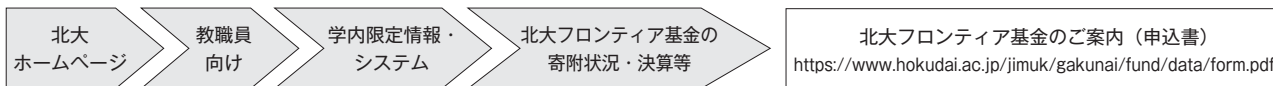


社会医療法人製鉄記念室蘭病院 様
（平成29年12月26日）

ご寄附のお申し込み方法

①給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。



②郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡しします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各部局事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

④クレジットカードでのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ（<https://www.hokudai.ac.jp/fund/form.html>）のクレジットカード寄附申込フォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室（事務局・学内電話 2017）

（総務企画部広報課）

平成29年度補正予算（第1号）案等（本学関係分）の主要事項

平成29年度補正予算（第1号）案等（本学関係分）の主要事項は、次のとおりです。

事 項	摘 要
第1号（平成29年12月22日閣議決定）	
【施設整備事業】	
○（白尻）水産実験所実験研究棟	620㎡
○非構造部材耐震改修	(1,090㎡)
	※（ ）は改修面積を表す

（施設部施設企画課）

株式会社北海道新聞社と包括連携協定を締結

12月25日（月）、本学は株式会社北海道新聞社と包括連携協定を締結しました。当協定は、本学が有する研究成果や教育機能及び蓄積された知識を、北海道新聞社が有する広報機能と連携させることによって、北海道地域への「知」の貢献を目指した包括的な協力体制を構築することを目的としています。

締結式は本学で行われ、名和豊春総長及び北海道新聞社の広瀬兼三社長による協定書への調印と代表者挨拶が行われました。

協定による具体的な取り組みとして、北海道新聞社のグループ会社である道新文化センターと協力し、来年度

から「北大道新アカデミー」を開講します。これは本学の教員が幅広い世代の市民らに対し、最新研究等についてわかりやすく講義するものです。

本講座の開講を皮切りに、今後は本学の研究等に関する情報発信、イン

ターンシップの実施など幅広い分野で相互に協力し合い、連携を強化してまいります。

（研究推進部産学連携課）



協定書を手に握手をする名和総長(左)と広瀬代表取締役社長(右)

中国科学院大学と大学間交流協定を締結 海外オフィスの設置について合意

12月12日（火）、中国科学院大学と学術交流に関する協定及び学生交流に関する覚書の調印を本学で行いました。調印式には、中国科学院大学から丁 仲禮学長、謝 勇国際協力所長、李 寅国際協力副局長らが出席され、本学からは名和豊春総長、笠原正典理事・副学長、横田 篤農学研究院長と王 秀峰総長補佐が出席しました。

中国科学院大学は、中国の最高研究機関である中国科学院の研究所等と連携している国立大学で、1978年に設立されました。数理科学、自然科学、地球科学、人文科学等24のカレッジ等を有し、学生は約4万5千人、教員は約1万5千人が在籍しています。本学は、母体となる中国科学院の東北地理・農業生態研究所と農学研究院・農

学院・農学部が2012年に、大連化学物理研究所触媒基礎国家重点実験室と触媒科学研究所が2007年に、それぞれ部局間交流協定を締結しています。

調印式の前には、丁学長が名和総長を表敬訪問し、書道で友好を深めました。また、中国科学院大学のキャンパ

ス内に本学のオフィスを今年度中に設置することについて合意し、今後、農学や医学の分野を中心として、両大学の全学的な研究や学生交流がますます活発に行われることが期待されます。

（国際部国際連携課）



調印後の記念写真

イギリスの最先端の研究者2名による講演会を開催

11月30日（木）、英国ケンブリッジにある大塚製薬グループの創薬ベンチャー Astex社の創薬研究者Tom Heightman博士及び英国ケンブリッジ大学のMatthew Gaunt教授による講演会を開催しました。

Heightman博士による講演「Fragment Based Drug Discovery ~ From Crystal to Clinic（フラグメント創薬～結晶から臨床へ）」、Gaunt教授による講演「New strategies for chemical synthesis: from C-H activation to protein functionalization（化学合成の新戦略：C-H活性化からたんぱく質化学修飾への展開）」には、それぞれ本

学の学生や教職員等約200名が出席し、最先端研究の講演に熱心に聞き入りました。

両研究者は、薬学研究院、総合化学院及び理学研究院を訪問し、研究に関する懇談や研究室見学を行った他、講演会の前に名和豊春総長を表敬訪問

し、今後の交流について懇談しました。

本学とケンブリッジ大学をはじめとする英国の研究者との交流が今後期待されます。

（国際部国際連携課）



講演中のHeightman博士



講演中のGaunt教授

平成29年度第1回HUCIフォーラム「大学の国際化に向けて」を開催

12月13日（水）、フロンティア応用科学研究棟レクチャーホールにおいて、本学と藤女子大学の主催、新潟大学と東海大学の共催により、平成29年度第1回HUCIフォーラムを開催しました。本フォーラムでは、海外における危機管理の専門家であるKomatsu Research & Advisory代表の小松啓一郎氏をお招きし、最近の国際情勢や海外派遣における危機管理について講演いただきました。当日は、本学の教職員や学生以外にも、各地の国公立大学の教職員が来場し、会場の映像を配信した函館キャンパスと新潟大学での視聴者も含め89名が参加しました。

フォーラムは、笠原正典理事・副学長による開会挨拶に始まり、名和豊春総長及び藤女子大学のハンスユーゲン・マルクス学長からの主催者挨拶の後、「大学の国際化に向けて」と題し、小松氏による講演が行われました。講演は3部構成となっており、Part1「世界情勢から読み解く国際情勢と国際的視野」では、国際情勢の読み取り方、国際化とグローバル人材の意味について、Part2「いま世界では何が起きているか」では、実際の国際情勢について、Part3「大学からの海

外派遣と危機管理とは」では、海外渡航における危機管理について、大学として何ができるかという観点で、情報収集、対策の一元化の重要性、現地ネットワークの開拓、また、実際のテロを想定しての避難方法などについて、紹介や解説いただきました。国際化に伴い学生や教員の海外派遣が増加している日本の大学では、海外における危機管理が今後の重要な検討課題で

あり、体験談を交えての講演は多くの出席者から大変興味深かったという感想が聞かれました。講演終了後には質疑応答があり、フォーラムは盛況のうちに終了しました。

なお、本フォーラムは、文部科学省スーパーグローバル大学創成支援事業の支援により実施しました。

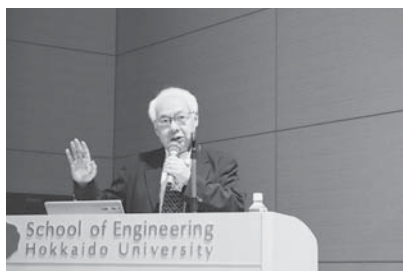
（国際部国際企画課）



名和総長による挨拶



マルクス学長による挨拶



講演する小松氏



会場の様子

高等教育研修センターにて研修会を開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、12月に以下のとおり研修会を開催しました。

(高等教育推進機構)

Classroom management techniques for classes conducted in English (英語で実施する授業のための教室管理テクニック) 参加者：13名

開催日：12月8日(金)

開催場所：情報教育館4階共用多目的教室(2)

開催概要：近年は留学生の増加や大学のグローバル化対応に伴い、英語による授業の増加が期待されている。英語で授業を行う際の注意すべき点等、言語・クラスマネジメント・文化の3つの側面を効果的に用いた学生中心の授業づくりを学ぶことを目的として開催。



シラバスのブラッシュアップ研修 参加者：7名

開催日：12月9日(土)

開催場所：情報教育館4階共用多目的教室(2)

開催概要：学生の動機付けを促すための授業計画を取り上げ、授業の基礎となるシラバスの見直しを行うことで、来年度以降の授業や授業づくり、シラバスをブラッシュアップすることを目的として開催。



ワークショップ「求められる学習支援を考える」 参加者：16名

開催日：12月15日(金)

開催場所：情報教育館4階共用多目的教室(2)

開催概要：教育の質保証、学生サービスなど様々な理由から行われている学習支援について、米国の事例を学び、求められている学習支援について考え、学習支援における課題の解決や更なる充実を目指して理解を深めることを目的として開催。



「平成29年度冬山登山講習会」を開催

11月28日（火）に情報教育館3階スタジオ型多目的中講義室において、冬山登山講習会を開催しました。本講習会は、学務部が冬山登山の事故防止のために、毎年山系の公認学生団体と実施しているもので、今回は山岳部（顧問：教育学研究院 松本伊智朗教授）の協力のもと、米山 悟氏（NHK長野放送局松本支局 報道カメラマン）を講師に招き、開催しました。

講習会では「自立した山登り・イグルーで身を守る」と題し、報道カメラマンとして携わられた国内外での山岳取材や、イグルーの有効活用・作成方法など、冬山の魅力や危険回避について講演いただきました。

参加した84名の学生・教職員・一般

市民の方々は、貴重な体験談に心躍らせ、イグルー作成など登山に有効な手段を学びました。また、登山の心構えの一つとして、登山での事故は高速道路での巻き込み事故とは異なり、落ち着いて考えることにより避けられるものであり、慌ててしまうと自分を見

失ってしまうため、落ち着いて自分の目で確認し、ちょっとした違和感に気付くことの重要性を認識し、冬山登山についての決意を新たにしていました。

（学務部学生支援課）



講演を行う米山氏



会場の様子

産学連携からベンチャー始動 海藻資源をビジネス化

12月20日（水）、北大認定商品の発売と北大発ベンチャー称号記授与の記者会見を、百年記念会館1階大会議室で行いました。水産科学研究院が開発した技術を用いて栽培したガゴメコンブ「北大ガゴメ」を使った商品の発売に、多くの報道陣が集まり、北海道の資源であるガゴメコンブを活用した商品への関心の高さがうかがえました。

この「北大ガゴメ」は、通常18カ月かけて約2メートルに成長した天然のガゴメコンブを商品に加工するのに対し、成長期間を3分の1、およそ6カ月に短縮し、同時に保湿や免疫力を強化する「フコイダン」の量を2倍以上含有しているのが特徴です。

商品開発を行った北海道マリニノベーション株式会社（函館市／布村重樹代表取締役）は、北大発ベンチャー認定企業の18社目となり、同研究院で確立した海藻栽培技術である「北大海洋栽培」を活用し、安定的な海藻資源の確保や、海藻に含まれる機能性成分の抽出など、加工原料の供給に関する

研究開発などを主な事業の柱としています。

名和豊春総長より、「これまで建設業に携わってきた布村社長が、食や健康分野のビジネスに取り組むことはまさにベンチャーです。水産科学研究院と一体となって生まれた同社には、研究成果を連続して商品化に繋げていく役割を担っていただきたい」と期待の言葉が贈られました。

今回発表した北大石鹸は12月21日（木）から函館市内にあるガゴメコンブのアンテナショップでテスト販売を行っています。価格は42グラム2個入りで、北大ガゴメの粉末を入れた「北

大ガゴメ石鹸」1,200円、北大ガゴメから抽出したフコイダンのみを使った「フコイダン石鹸」1,500円、海藻のアカモクから抽出した抗酸化作用のあるフコキサンチンを使った「フコキサンチン石鹸」1,500円、その他にそれぞれを4分の1にカットしたお試しサイズも用意されています。

◆商品の問合わせ先：ねばねば本舗
TEL：0138-27-4777
ホームページ：http://www.konbu-gagome.com/

（産学・地域協働推進機構）



「北大ガゴメ」を用いた北大石鹸



名和総長（右）と握手する布村代表取締役（左）

ライフサイエンス系 新技術説明会を開催

11月16日（木）にJST東京本部別館ホール（東京・市ヶ谷）において、国立研究開発法人科学技術振興機構と産学・地域協働推進機構主催、特許庁、北見工業大学、室蘭工業大学、北海道立総合研究機構後援で「ライフサイエンス系 新技術説明会」を開催しました。

本説明会は本学が主催者となり、北海道地区の大学・高等専門学校・公設試験研究機関等と連携して開催しており、

試験研究機関のライフサイエンス系の特許技術シーズを集め、事業化及び共同研究を希望する企業等とマッチングを図るイベントです。当日は研究者自ら特許技術について説明し、面談を希望する企業との個別面談を行いました。

本学では、平成22年度から北海道地区の他大学・高等専門学校・公設試験研究機関等と連携して開催しており、

7回目の開催となりました。今回は1日で11件の発表（本学研究者からの発表は4件）がなされ、来場者数142名、技術個別相談件数15件、名刺交換数86件と大変盛況でした。今回引き合いを受けた企業に継続的なフォローを行い、今後の技術移転活動に反映させてまいります。

（産学・地域協働推進機構）



薬学研究院 佐藤悠介助教



工学研究院 渡慶次学教授



医学研究院 宮武由甲子助教



医学研究院 津田真寿美准教授



会場の様子

ものづくり系 新技術説明会を開催

12月7日（木）にJST東京本部別館ホール（東京・市ヶ谷）において、国立研究開発法人科学技術振興機構と産学・地域協働推進機構主催、特許庁、北見工業大学、室蘭工業大学、北海道立総合研究機構後援で「ものづくり系新技術説明会」を開催しました。

新技術説明会は、本学が主催者となり、北海道地区の大学・高等専門学校・公設試験研究機関のナノテク・材

料・ものづくり系の特許技術シーズを集め、研究者が自らの特許技術について実用化を展望した技術説明を行うことで、事業化及び共同研究を希望する企業等と産学連携マッチングを図るイベントです。

本学では、平成22年度から北海道地区の他大学・高等専門学校・公設試験研究機関等と連携して開催しており、8回目の開催となりました。今回は1

日で10件の講演発表（本学研究者からの講演発表は6件）がなされ、来場者数207名、技術個別相談件数12件、名刺交換数111件と例年通りに大変盛況な会となりました。今回引き合いを受けた企業に継続的なフォローを行い、今後の技術移転活動に反映させてまいります。

（産学・地域協働推進機構）



新技術説明会の様子



工学研究院 長野克則教授



電子科学研究所 石橋 晃教授

第1回食品産業エルム会 in 大阪「機能的食品セミナー」で講演

12月2日（土）、大阪ガスショールーム・ハグミュージアムで開催された本セミナーにおいて木曾良信地域協働部門長兼食科学プラットフォーム長が講演しました。本セミナーは、ひょうご健康都市推進協議会の「平成29年度農林水産省機能的農産物などの食による健康都市づくり支援事業」機能的食品セミナーと食品産業エルム会（食品関連企業の本学OB・OGの交流会）との共催で開催されました。

木曾プラットフォーム長は、「北方圏未利用海藻を活用した商品開発についてーガゴメとダルスー」と題して、水産科学研究院が中核となった産学官

連携によりブランド化に成功したガゴメの例や、農林水産省「農林水産業・食品産業科学技術推進事業」の委託により研究中の紅藻類「ダルス」の機能的や商品化について発表しました。当日は講演にあわせて、株式会社山下水産（寿都町）の商品「ダルスの佃煮」や株式会社満寿屋商店（帯広市）が試作したダルス入りのパッケージを試食いただき、大変好評でした。

今回の講演は、大学で行っている研究成果のアウトリーチ活動の一環でしたが、参加者に「聴く（聴覚）」だけでなく、「味わう（味覚）」を体験していただくことで、説得力のある研究

成果のプレゼンテーションにつながりました。

（産学・地域協働推進機構、大学力強化推進本部）



会場の様子

学生による社会企業のアイデアコンペ「ハルトプライズ」の 学内選抜会を開催



優勝チーム（中央）、審査員、オブザーバー、参加チーム、学生運営委員の集合写真

本学では3回目の開催となる、学生による国際的な起業アイデアコンペ「ハルトプライズ」の学内選抜会を12月9日（土）に学術交流会館大講堂で行い、産学・地域協働推進機構と人材育成本部が後援しました。全世界で1,000以上の大学が学内選抜会を開催し、3段階の厳しい審査を勝ち抜いた6チームが国連本部で実施される最終選抜会に参加、そこで選ばれた優勝チームに賞金100万ドルと、起業のための手厚い支援が与えられるこの国際コンペは、「学生のノーベル平和賞」とも呼ばれています。

社会企業は行政による公的支援や企業・NGO等の慈善事業を補完し、受益者への持続的な支援を可能にする手段として近年注目を浴びています。社会企業を学生時代に立ち上げ、急成長させることで社会的課題の解決に向けた大きなインパクトを与えることを目的としたハルトプライズは、2009年に米国の学生が発案し、それ以来毎年規模が拡大しています。これまで日本から参加した大学は本学の他には東京大学、上智大学でしたが、今年度はハルトプライズ日本法人が設立され、国内10以上の大学で学内選抜会が開催され

ました。

産学・地域協働推進機構と人材育成本部では、平成29年度に採択された文部科学省の次世代アントレプレナー人材育成事業「EDGE-NEXT」において、ハルトプライズへの挑戦を通した「ソーシャルアントレプレナーの育成」を特徴的な取り組みとして打ち出しています。大学院生だけでなく、学部段階からアントレプレナー教育を行うことを目的としたこの育成事業において、本学では、①学内選抜会とその前後のセミナー等を企画・運営する学生委員会へのメンタリングと支援、②学内選抜会への参加を希望する学生に対するレクチャー実施やセミナー講師招聘、③学内選抜会を勝ち抜いたチームに対する提案内容強化のための支援、などの取り組みを行っています。

世界各国の学内選抜会を勝ち抜いた1,000以上の学生チームは3月上旬に世界16か所で同時に開催される地区大会において更に選抜され、そこで勝ち残る50チームがロンドンで強化合宿に参加し、更に6チームにまで絞り込まれ、9月に国連本部で最終選抜会が開催され、その年の優勝チームが決められます。社会企業を起業するアイデア

について、日本国内のみならず、世界の学生やそれを支援するメンターたちと直接議論し、ネットワークを広げることができるハルトプライズへの挑戦は、アントレプレナーを目指す学生たちにとって大変刺激的です。今回の学内選抜会では54名の学生（日本人22名、外国人32名）が参加し、学部生の参加が16名もあり、今後の成長が楽しみです。

産学・地域協働推進機構では、東北大学、小樽商科大学など6大学とコンソーシアムを結成して、アントレプレナー教育プログラムを構築中です。職業選択の一環として、起業をどのように考えるべきかといった導入から、ハルトプライズのようなコンペ提案の支援まで、メニューを揃えていく計画です。人材育成本部はこの活動を支援しています。

◆http://www.mcip.hokudai.ac.jp/cms/cgi-bin/index.pl?page=contents&view_category_lang=1&view_category=1885

（産学・地域協働推進機構、人材育成本部）

人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで 第33回「赤い糸会&緑の会」を開催

人材育成本部のS-cubicでは、12月8日（金）に学術交流会館にて本年度第2回「赤い糸会&緑の会」を開催しました。本会は、企業と若手研究者（DC, PD）との直接情報交換会であり、企業には若手研究者の高い専門性や総合力を理解いただき、若手研究者には企業の研究開発活動や企業における博士の活躍状況等を知ってもらうことで、相互理解を深め、視野の複線化、活躍フィールドの拡大を図ることを目的としています。

今回で「赤い糸会&緑の会」は通算33回目の開催となり、若手研究者の参加も回を重ねるにつれ増加し、10部局からDC 45名、また、平成26年度末より採択された科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業で、東北大学から1名、名古屋大学から1名、兵庫県立大学から1名、お茶の水女子大学から2名の若手研究者が参加しました。企業からは、各種業界から17社（36名）、オブザーバ企業1社、オブザー

バ大学4校、総勢45名が参加しました。

本会では、冒頭の人材育成本部長の笠原正典理事・副学長による開会挨拶、赤い糸会担当の樋口直樹特任教授による趣旨説明の後、参加企業の皆様から業界動向や博士の活躍状況等の紹介が行われ、その後、若手研究者の自己紹介ポスター発表、企業ブースを訪問しての個別情報交換等が活発に行われました。さらには、この「赤い糸会&緑の会」を通じて企業に就職した若手研究者の先輩方が今回は7名企業説明会に参加し、後輩達に対して熱い思いを語ってくれました。

開催後の企業側のコメントでは、「多くの学生さんと会う機会であり、採用にとって有効と思っています」「年々活発化していて将来が楽しみです」との声をいただきました。また、参加した若手研究者からは、「普段交流することができないような異分野の企業と交流できるのが楽しかったで

す」「非常に密に企業の方と関われるのは大きなメリットだと感じた。自分の専門が企業でどう活かせるのかを知る良い機会だと思う」といった嬉しい声も聞かれました。

終わりに、人材育成本部では以上の活動に加えて、企業事業所視察、Advanced COSA, J-window, キャリアパス多様化支援セミナー、キャリアマネジメントセミナー、企業での長期インターンシップ等を通して、これまで以上に若手研究者の実践力を高めることへ注力していくとともに、コンソーシアム結成により、東北大学や名古屋大学等が運営しているより多くの洗練されたプログラムも博士達に活用されています。今後ともご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

なお、興味のある方は人材育成本部のホームページをぜひご覧ください。

◆<http://www2.synfoster.hokudai.ac.jp>

（人材育成本部）



笠原人材育成本部長の開会挨拶



樋口人材育成本部特任教授の趣旨説明



企業からの業界動向説明



説明に聞き入る若手研究者



若手研究者のポスター発表



企業との個別情報交換

■ 部局ニュース

喜田 宏ユニバーシティープロフェッサー・名誉教授に タマサート大学（タイ）が名誉公衆衛生学博士号を授与

12月1日（金）、タマサート大学
タープラチャンキャンパス内にある
シーブーラパー記念講堂において2017
年タマサート大学学位授与式が行わ
れ、タマサート大学卒業生及び教職員
が見守る中、タイ国王ラーマ10世から
喜田 宏ユニバーシティープロフェッ
サー・名誉教授に名誉公衆衛生学博士
号が授与されました。喜田名誉教授は
インフルエンザなどの人獣共通感染症
の制圧に関する研究を通じ、公衆衛生
分野において大きく寄与した功労が特
に評価されました。

タマサート大学は1934年に開学した
タイ王国で2番目に歴史の長い大学で
あり、バンコク市内他国内3か所に19
学部と4単科大学他を保有する国内有
数の総合大学です。2014年1月に本学
との大学間交流協定、2015年1月に人
獣共通感染症リサーチセンターとタマ
サート大学公衆衛生学部との部局間交
流協定が締結され、教員及び学生の双
方向人事交流、共同シンポジウムの開
催及び共同研究の遂行などの実績を重

ねてきました。

喜田名誉教授は授与式後にタマサー
ト大学公衆衛生学部にて「For the
control of avian influenza and the
preparedness for future pandemics
（鳥と人インフルエンザの克服戦略）」
と題して名誉博士号授与記念講演を行
いました。講演にはタマサート大学公
衆衛生学部長ら多数の教職員のみなら
ず、近隣の大学、研究所の研究者、及
びタイ王国公衆衛生省や農業省からも
聴講者が集まり、喜田名誉教授のイン

フルエンザ研究とその対策について熱
心に耳を傾けていました。

記念講演後、タマサート大学主催の
名誉学位授与祝賀会が催され、タマ
サート大学理事長及び学長ら役員と、
喜田名誉教授を含む本年度名誉学位授
与者4名及びその関係者が招待されま
した。その席上、喜田名誉教授の業績
について紹介があり、多数の参列者か
ら賛辞が贈られました。

（人獣共通感染症リサーチセンター）



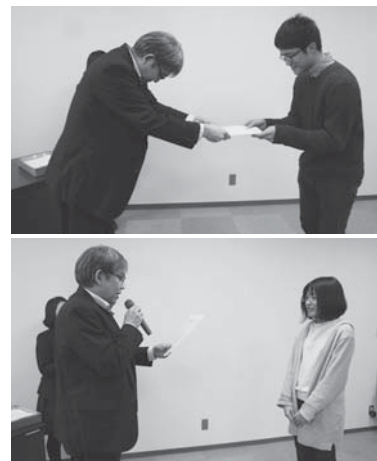
タイ国王ラーマ10世から学位記の授与

平成29年度 薬学部成績優秀賞授与式を挙行

薬学部では、12月15日（金）に本学
部会議室において、平成29年度北海道
大学薬学部成績優秀賞授与式を行いま
した。

この賞は「GPA制度の導入に伴い、
学業が優秀な学生を表彰し、学生の向
学心を喚起する」ことを目的として、
平成17年度以降に入学した学部3年次
生を対象として設けられたもので、今
回で11回目の授与式となります。

今年度は、学部専門科目の成績が特
に優秀な4名が受賞者に選ばれました。



表彰状を授与される成績優秀者

授与式では、薬学部教員が見守るなか、佐藤美洋薬学部長から表彰状と記念品が一人ひとりに授与されました。今後もこの賞が本学部学生の向学心をより一層喚起するものとなることを期待しています。

(薬学研究院・薬学部)



成績優秀者と佐藤学部長（中央）

観光学高等研究センター公開講座 「デスティネーション・マネジメントと地域のこれから」が終了



最終回集合写真



講義風景

観光学高等研究センターでは、平成29年度公開講座「デスティネーション・マネジメントと地域のこれから」を、11月9日から12月21日までの毎週木曜日、全6回にわたり実施しました。

今回の公開講座では、6月に国際広報メディア・観光学院が「デスティネーション・マネージャー」育成のための履修証明プログラムを日本で初めて開講したことに合わせたテーマを取り上げました。

第1回は、木村 宏特任教授が「ロングトレイルの普及の視点から考えるデスティネーション・マネジメント」と題して、地域連携による活性化手法としての長距離自然遊歩道（ロングトレイル）について講じました。

第2回は、パイチャゼ スヴェトラナ助教が「多文化共生の視点からデスティネーション・マネジメントを考える」と題して、先住民と外国人長期滞在者といったマイノリティーが居住する北海道の特徴と地域資源のデスティ

ネーション・マネジメントについて講じました。

第3回は、下休場千秋教授が「エコツーリズムの視点からデスティネーション・マネジメントの意味を問い直す」と題して、アフリカや日本国内の事例を通してエコツーリズム、ウェルネスツーリズム、フットパスによる地域づくりについて講じました。

第4回は、西山徳明教授が「北海道大学の観光創造学とデスティネーション・マネジメント・オーガニゼーション」と題して、現代の観光立国をめぐる社会のうねりと、その中における北海道の地域づくり、地方創生にDMO（デスティネーション・マネジメント・オーガニゼーション）が果たす役割について講じました。

第5回は、田代亜紀子准教授が「ヘリテージ・マネジメントからデスティネーション・マネジメントを考える」と題して、遺跡、歴史的建造物、景観、街並みなどのヘリテージの保存と活用を、地域社会によって持続的に進

める、ヘリテージ・マネジメントについて講じました。

第6回は、石黒侑介准教授が「スペイン・バルセロナにみるデスティネーション・マネジメントの最先端」と題して、観光先進国のスペイン・バルセロナの事例から、世界の観光地が直面する課題とその解決にDMOが果たす役割について講じました。

デスティネーション・マネジメントが、日本の観光分野において現在最も注目されているテーマの一つであることから、例年以上に多様な35名の受講者があり、実践的な視点からの活発な議論が展開された回もありました。来年度もより良い公開講座を開講することを目指し、これから企画を考えていきます。

(観光学高等研究センター、
国際広報メディア・観光学院、
メディア・コミュニケーション研究院)

スラブ・ユーラシア研究センター2017年度冬期国際シンポジウム 「ロシア革命と長い20世紀」 開催



北海道開拓の村にて

ロシア革命から100年目の昨年は、国内外で数多くの関連研究集会が開かれましたが、スラブ・ユーラシア研究センターの冬期国際シンポジウムは「ロシア革命と長い20世紀」というテーマを設定し、12月7日（木）・8日（金）に開催しました。

世界の中でもとりわけ東アジアは冷戦が続いているような状況が見られます。しかしシンポジウムでは、19世紀末から今日を含む「長い20世紀」の中にロシア革命を置いてみることで

単に社会主義とは何だったのかという問いを超える様々な問いを立てることを試みました。シンポジウム前日には、共同利用・共同研究「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」の「近現代の中央ユーラシアに関する共同研究班」の成果の一部として、ワークショップ「戦争と社会秩序の変容：ロシアによる中央アジアとコーカサスの征服」も開かれました。

シンポジウムの1日目は、20世紀初



第1セッションの様子

頭の立憲革命の波を切り口に世紀転換期のロシアがユーラシア大陸で占めた位置を確認することから始め、戦間期と冷戦期における世界とソ連との相互関係について、主に経済と文化の観点から考察しました。2日目は、1917年の意味を再考することから始め、革命・内戦のロシア周辺への波及、そして今日につながる戦後ソ連社会への影響を考えるものになりました。

2日間の延べ参加人数は130名（うち外国人43名）で、議論は大いに盛り上がり、今後発展させていくべき研究のヒントが盛りだくさんでした。

（スラブ・ユーラシア研究センター）

環境健康科学研究教育センターが環境と健康に関する市民講演会 「これまでの成果と今後の展望～WHO研究協力センターとしての役割～」を開催

11月20日（月）に、サステナビリティ・ウィーク2017のテーマである「世界の課題解決に貢献する北海道大学へ」のもと、本学がWHO（世界保健機関）との連携を通じて行っている活動を紹介する講演会を開催しました。まず、WHO西太平洋地域オフィスのRokho Kim博士からは、ビデオにより「西太平洋地域におけるWHOとSustainable Development Goals（SDGs）達成のためのWHO研究協力センター（WHOC）との将来のパートナーシップ」と題して、西太平洋地域における生活環境と特に子どもの健康に関する問題や、SDGs（持続可能

な開発目標）を達成するための取り組みに関する講演をいただきました。

次に、本センターの荒木敦子准教授からは、「環境化学物質による健康影響：研究からWHOC活動へ」と題して、本センターが長年実施をしている出生コホート研究や、室内空気質の研究結果と、今後、WHOCとしてどう活動していくかの紹介を行いました。

引き続き、人獣共通感染症リサーチセンター統括の喜田 宏ユニバーシティプロフェッサーより、「北海道大学人獣共通感染症リサーチセンターのWHOCとしての活動」と題して、鳥インフルエンザの拡散を防ぐ上での実

践例について講演があり、「One World, One Health（一つの世界、一つの健康）」というコンセプトのもとで人獣共通感染症に対する取り組みの紹介がありました。

最後に、国際部国際連携課の高野



講演の様子

剛氏より「北海道大学におけるJICAとの連携協力～これまでの活動事例と今後～」と題し、日本が行っている国際開発協力具体例の紹介や、本学の取り組みについて多岐にわたって説明があり、講演会を締めくくりました。

講演にあわせて、参加者が研究や日常の活動について理解を深められるよう、ポスターやパネルの展示を行いました。学生を中心とした多くの参加者が展示説明者に積極的に質問したり、活発な討論を行っていました。

本センターは、WHOCCの一つとして世界の人々と協力し、SDGsの達成に

向け進んでいきます。また、環境と健康に関する様々な課題に取り組むと共に、市民講演会や、研究成果の発表を

できるだけ多く実施していく予定です。

(環境健康科学研究教育センター)



講演者・関係者の集合写真

文学研究科で「LGBTフレンドリーなキャンパス作りのための教職員研修」を開催

文学研究科では、12月1日(金)、札幌市市民文化局男女共同参画室男女共同参画課長の廣川衣恵氏をお招きして、「LGBTフレンドリーなキャンパス作りのための教職員研修～みんながのびのびと輝くために～」を開催し、文学研究科の教職員ら60名以上が参加しました。

LGBTとは性的マイノリティーの総称ですが、そのカテゴリーは複雑かつ複合的なため、理解がなかなか進みにくいのが現実です。そのため大学内での対応策や配慮のための制度作りも遅れているといわざるを得ません。そのような中、文学研究科では、LGBTフレンドリーなキャンパスとはどのようなものかについて、札幌市パートナーシップ宣誓制度の立役者でもある廣川氏にご講義いただきました。このテーマでの大学からの出前講座は初めてのことでした。

廣川氏はまず、性的マイノリティー

といわれる人たちの割合は日本全国で8%で、これは佐藤や鈴木といったメジャーな名字の上位7位までを足したのと同程度の人数に匹敵すると説明され、LGBTがとても身近なテーマであることを示しました。一方で、日本ではこのテーマに関する理解や対策が世界的に見ても非常に遅れているために、依然として学校現場でのいじめや職場などでの差別がなくなる現実を説明されました。

札幌市はLGBTへのさらなる理解とLGBTフレンドリーな社会を目指して積極的に取り組んでおり、平成29年6月には「札幌市パートナーシップ宣誓制度」を制定しました。これは、全国6都市目、政令指定都市としては初めてのことで、また「LGBTはっとライン」の開設や「札幌市LGBTフレンドリー指標制度」の開始といった札幌市の取り組みについて紹介されました。

最後に、大学でのLGBT対応の必要

性とその取り組みポイント、さらにLGBTだけでなく様々な人々が暮らす多様化時代に求められるチカラについて説明され、およそ1時間にわたる講義は終了しました。

アンケートは、「とても聞きやすいプレゼンでした」「自分の意識を変えるのに役立つ内容でした」など、総じて肯定的でした。中には、「内容自体に違和感」「私自身にはにわかに受け入れ難い考え方がテーマだったが、そうだからこそ色々な意味で有意義な講座だった」といった率直な意見もあり、本研修会開催の成果が早速見られました。

研修会後、廣川氏は、「日本の未来を創る人材の育成を担う教育機関として開かれた大学であってほしい」と本学にエールを送り、今後も協力を惜しまないと話されました。

(文学研究科・文学部)



研修会の様子



講師の廣川氏



コーディネーターの瀧名波栄潤教授(文学研究科西洋文学講座)

教育学研究院でフォーラム「子どもの貧困を考えるー北海道・札幌市における子どもの生活実態調査からー」を開催

12月16日（土）に学術交流会館において、北海道、札幌市、当研究院「子どもの生活実態調査」研究班主催、北海道新聞社及び当研究院附属子ども発達臨床研究センター共催によるフォーラム「子どもの貧困を考えるー北海道・札幌市における子どもの生活実態調査からー」を開催しました。「子どもの生活実態調査」は、松本伊智朗教授を代表とする、科学研究費助成事業基盤研究（A）「子どもの貧困に関する総合的研究：貧困の世代的再生産の過程・構造の分析を通して」の一環で、フォーラムはその結果を市民と共有し、議論を深めることが目的です。

調査は北海道内の幼児及び小・中学生とその保護者あわせて約3万人を対象とし、北海道内は研究班と北海道の

共同、札幌市分は札幌市の独自調査として実施され、約70%から有効回答を得ました。調査票の設計は研究班と北海道、札幌市が共同で行い、統一的な分析が可能です。

当日は、高橋はるみ北海道知事、秋元克広札幌市長から挨拶をいただいた後、松本教授による基調報告を行い、引き続き、花岡祐志北海道子ども未来推進局長、有塚広之札幌市子ども未来局子ども育成部長、高橋勇造NPO法人Kacotam（カコタム）理事長、村尾政樹公益財団法人あすのば事務局長、山野良一名寄市立大学教授、辻 智子当研究院准教授によるパネルディスカッション「北海道の子どもの貧困対策を考える」が行われました。最後は小内 透研究院長の挨拶で、盛会のう

ちに幕を閉じました。社会的関心は高く、事前申込で定員の300名を超えました。

フォーラムに先立ち、研究班メンバーの個別報告を行う連続フォーラム「北海道の子どもの生活と貧困」を遠友学舎で開催し、各回80～100名の幅広い層からの参加者がありました。これらは、教育学研究の特徴を反映して、社会科学と心理学の双方から学際的な分析を行ったものです。調査と一連のフォーラムは、大学と自治体、地域社会の連携によって行われ、すべてのフォーラムを子連れ参加可能とし、託児所を設けました。今後更なる展開が期待されます。

（教育学院・教育学研究院・教育学部）

連続フォーラム「北海道の子どもの生活と貧困」

第1回 11月23日（木・祝）午前

「子どもの貧困研究の枠組みと課題」（松本伊智朗教授）、「子育て家族の仕事と家計」（鳥山まどか准教授）

第2回 11月23日（木・祝）午後

「乳幼児期の子育てと環境」（川田 学准教授）、「子どもと家族の健康と疾病・障害」（関あゆみ准教授）

第3回 11月30日（木）

「子どもの学びと学級」（大谷和大助教）、「進学・所得・地域」（上山浩次郎助教）

第4回 12月7日（木）

「子ども期の生活と経験」（大澤真平札幌学院大学准教授）、「子どもの貧困と発達」（加藤弘通准教授）



高橋北海道知事による挨拶



秋元札幌市長による挨拶



松本教授による基調講演



パネルディスカッションの様子



小内研究院長による閉会挨拶

農学研究院で安全保障輸出管理FD・平成29年度第2回農学研究院FD研修会を開催

農学研究院では、平成29年度第2回FD研修「安全保障輸出管理」を12月27日（水）に農学部大講堂にて、安全保障輸出管理委員会と合同で開催し、教員47名、事務職員28名が参加しました。

当日は、農学研究院の野口 伸副研究院長による開会の挨拶の後、3人の講師から講演がありました。まず、安全保障輸出管理全学責任者の金子純一准教授から、「工学系教員に理解していただきたい安全保障輸出管理のポイント」と題して、農学系教員も念頭におき、手続きを踏んでエビデンスを残すことが重要である点など、全体の話がありました。次に、安全保障輸出管理委員会委員の大林明彦教授から、安全保障輸出管理について、①そもそも何のため？「目的と手段」と「最近の動向」、②どこで決めている？「国際的枠組みと国内の枠組み」、③何が規制されている？「リスト規制とキャッチオール規制」、④リスト規制とは？「貨物・技術の合体マトリックス表の見方その1」、⑤規制される技術って何？「貨物・技術の合体マトリックス表の見方その2」、⑥キャッチオール規制とは？「リスト規制との関係及び

外国ユーザーリストの見方」、⑦規制と研究室のテーマ・実験機器との関係？「おそれの強い貨物例の見方」、⑧違反したらどうなる？「外為法の改正により罰則が大幅に強化」、⑨「本学の体制と昨年度の取り組み・トピックス」などの詳細な説明がありました。さらに、産学連携課利益相反・安全保障輸出管理担当の渡部陽一係長から、安全保障輸出管理に係る基礎科学

分野、公知情報について解説がありました。

とてもわかりやすい講演で、また講演後の質疑でも明快で今後の教育研究に役立つ応答があり、教職員の安全保障輸出管理問題への理解がより深まりました。3人の講師には、ここに改めて深く感謝申し上げます。

（農学院・農学研究院・農学部）



野口副研究院長の挨拶



金子准教授による講演



安全保障輸出管理委員会 大林教授による講演



研修会の様子

工学系部局で「第2回こころのケアに関する講習会」を開催

工学研究院，情報科学研究科，量子集積エレクトロニクス研究センターでは，「工学系部局なんでも相談室」による主催行事として，年2回「こころのケアに関する講習会」を開催しています。

12月15日（金）には，工学研究院B31講義室において，工学系部局なんでも相談室カウンセラーである石原一人氏（合同会社メンタルアシスト北海道・職業カウンセラー）を講師として，本年度第2回目の「こころのケアに関する講習会」を開催しました。

本講習会では，「メンタルヘルス不調者への支援を考える－なんでも相談室相談事例から－」と題して，相談事例を基に，発達障害を含む様々な心理

的な課題について取り上げられ，20名の教職員が参加しました。

本講習会終了後のアンケートでは，「実例に基づく相談内容・対応等の説明が参考になった」「講習会の内容が今後の生活に役立つと思う」「こころのケアに関心が深まった」等の感想が

多く寄せられました。

工学系部局では，今後も教職員・学生向けに「こころのケアに関する講習会」を開催する予定です。

（工学院・工学研究院・工学部，情報科学研究科，量子集積エレクトロニクス研究センター）



講演する石原カウンセラー



受講風景

第12回医学研究院連携研究センター研究成果発表会を開催

第12回医学研究院連携研究センター研究成果発表会を11月28日（火），医学部学友会館「フラテ」ホールで開催しました。

本センターは，長期的展望に基づいて堅実な知を追求する基盤的研究と，目標と期間を設定して先端的・革新的な研究開発を目指す戦略的研究の融合を図ることを目的として，平成18年4月1日に設置された学際的研究拠点です。これまで，大型研究プロジェクトを中心として多彩な研究活動が展開され，医学・生命科学と理工学の融合領域において，世界をリードする数多くの研究成果が得られています。

今回の研究成果発表会では，53名の

教職員・学生が参加し，センターの各分野から最新の情報が提供されました。また，特別講演として，国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）臨床研究・治験基盤事業部長及び創薬戦略部長の河野典厚氏による「医薬品の研究開発を巡る状況に

ついて」と題した講演を行いました。参加者にとって，今後の取り組みに向けた新たな可能性が示唆された研究成果発表会となりました。

（医学院・医学研究院・医学部）



講演する及川 司先生



講演する河野氏

低温科学研究所技術部で第7回技術部セミナーと第23回技術報告会を開催

12月8日（金）、低温科学研究所講堂において低温科学研究所技術部、技術支援本部共催による第7回技術部セミナーと第23回技術報告会を開催しました。

セミナーでは、国立極地研究所南極観測センターと理学研究院附属地震火山研究観測センター観測技術部から講師を招聘し、南極地域観測隊での様々な業務内容について講演していただきました。報告会では、10件（うち3件は要旨のみ）の低温科学研究所技術部

が関わった研究発表や技術報告が行われました。

例年同様、専門領域を超えて、多様な分野の研究に触れる貴重な場となり、延べ40名を超える研究所内外の研究者・学生・技術職員などが参加し、活発な意見が交わされました。

本報告会の内容をまとめた「北海道大学低温科学研究所技術部技術報告第23号」を発行しました。報告集は本研究所技術部ウェブサイトをご覧ください。

◆<http://www.lowtem.hokudai.ac.jp/tech/>

（低温科学研究所）



技術報告会の様子

生命科学院がアクティブラーニング形式の「Research Ethics Workshop for IGP students（研究倫理ワークショップ）」を開催



参加学生集合写真

12月5日（火）、昨年度に引き続き2回目の“Research Ethics Workshop for IGP students（研究倫理ワークショップ）”を開催しました。本ワークショップは、国際部国際教務課とオープンエディケーションセンターの協力のもと、国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムとして生命科学院が実施する「次世代の生命科学グローバルリーダー養成プログラム International Graduate Program, Training Program for Global Leaders in Life Science (IGP-GLLS)」が、プログラム学生を対象として実施しました。また、先端生命科学研究院の相沢智康准教授が講師を務めました。

受講登録をした学生は、事前に大学

院準備教育プログラム用に準備されたe-learning systemで広島大学の眞嶋俊造准教授による「研究倫理」講義を動画視聴し、事前学習により得た知識を活用しながら、与えられた研究倫理に関する課題に取り組むという反転学習形式でのアクティブラーニングを行いました。講義は全編英語で実施され、日本人学生2名、中国・インド・バン



グループディスカッションの様子

グラデシュ・エチオピア・スペイン・モンゴルからの外国人留学生10名が3つのグループに分かれ、ディスカッションが活発に行われました。普段接する機会の少ない様々な研究室の日本人学生と外国人留学生が共学することで、知識や考え方を共有するだけでなく、意見を述べる姿勢についても、それぞれの学生が良い刺激を受けたことと思います。

ワークショップ終了後には、懇親会を行い、研究生活や日本の印象等を語り合いながら、プログラム生同士が親睦を深めました。

開催にあたりご理解・ご協力いただいた指導教員の皆様、ご支援いただいた事務担当スタッフの皆様には深くお礼申し上げます。

（生命科学院・先端生命科学研究院）



歯学研究院で自衛消防訓練を実施

歯学研究院では12月7日（木）に自衛消防訓練を実施しました。

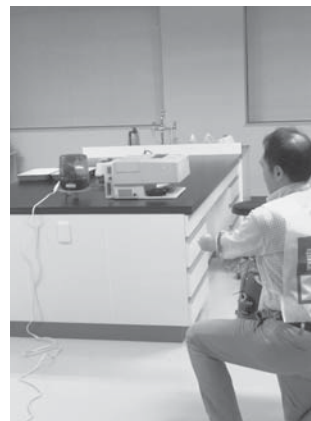
今回の訓練は、C棟5階実験室から夜間に出火したとの想定で、自衛消防隊長である横山敦郎歯学研究院長の指揮により、各班に分かれ、自衛消防隊による通報連絡、避難誘導、初期消火、教職員に対する安否確認等の訓練を実施しました。

訓練終了後、横山研究院長から「今回の訓練は順調に実施できた。災害時にはこの訓練を思い出して行動してほしい」との講評がありました。

（歯学院・歯学研究院・歯学部）



横山研究院長による講評



消火器操作訓練の様子

附属図書館で「救命導入（AED）講習会」を開催

附属図書館では、12月19日（火）・20日（水）の2日間、札幌市北消防署札幌出張所の所員3名を講師に迎え、本館4階大会議室において図書館職員を対象にした救命導入（AED）講習会を開催しました。

19日（火）は41名、20日（水）は32

名、合計73名の参加があり、講師より人体モデルを使って倒れている人への心臓マッサージやAED（自動体外式除細動器）使用の実践訓練を行いました。

附属図書館は本館2階総合カウンター前と北図書館2階カウンター前に

AEDを設置し、札幌市が実施している「さっぽろ救急サポーター事業」にも参画しています。

（附属図書館）



講師の消防署員による説明



実践訓練の様子

「院生・若手研究者のための英語論文執筆セミナー」を開催

附属図書館、社会科学実験研究センター、人材育成本部、大学力強化推進本部URAステーションは、11月28日（火）に学术交流会館小講堂において、「院生・若手研究者のための英語論文執筆セミナー」を開催しました。本セミナーには大学院生・博士研究員（ポスドク）を中心に計93名が参加しました。レクチャーと司会を英語で行ったため、外国人留学生も35名参加し、好評を博しました。

英語論文執筆を支援する企画は、近年、附属図書館、人材育成本部をはじめとして学内の複数の部署が企画・開催していることもあり、多くの大学院生や教員の強い関心を集めています。本セミナーは、特にこれから英語での論文執筆に取り組む大学院生・若手研究者を対象として毎年開催しているも

ので、今年度で3回目の開催となりました。

セミナーは、SAGE Publicationsアジア・太平洋地域マネージング・ディレクターであるRosalia Da Garcia氏による英語論文執筆に関するレクチャーで始まり、続いて関西大学経済実験センターでポスト・ドクトラル・フェローの稲葉美里氏（平成28年文学研究科卒）による若手研究者の論文執筆体

験談、附属図書館の堀越邦恵氏によるクリエイティブ・コモンズに関する講演が行われました。最後に、結城雅樹社会科学実験研究センター長・文学研究科教授から、本学の大学院生が公開した英語論文を対象とする論文賞についての説明があり、盛会のうちに終了しました。

（附属図書館）



講演を行うRosalia氏



講演を行う稲葉氏

北大元気プロジェクトのイベント開催に附属図書館が協力

北大元気プロジェクトに採択された「オープンストリートマップを利用した北大情報のアーカイブ化」について、附属図書館が協力してイベントを実施しました。

このイベントは、工学院の学生を中心に企画された「ウィキペディアタウン&オープンストリートマップワークショップ in 北大」で、11月3日（金・祝）・4日（土）の2日間、附属図書館本館オープンエリアを会場として開催しました。附属図書館は、ウィキペディア執筆のための文献の提供、作業のためのスペースの提供、講師の派遣の3点について協力しました。

1日目は、ウィキペディア日本語版管理者の日下九八さん、ウィキペディアタウンに詳しい山形巧哉さん、附属

図書館の川村路代さんの3名を講師として、ウィキペディア編集に関する講義と、本学の歴史的建築物に関するウィキペディアの記事の編集を行いました。2日目は、OpenStreet MapFoundation Japanの古川泰人さんを講師として、オープンストリートマップとウィキペディアの関係や、

オープンストリートマップ編集の実習を行いました。なお、本イベントには、本学の学生と一般市民など34名が参加しました。

附属図書館は、今後も意欲ある学生の活動に協力していきます。

（附属図書館）



講義の様子



ウィキペディアの記事を編集する参加者

総合博物館で生体展示「小さな小さなホ乳類 トウキョウトガリネズミ」を開催

チビトガリネズミ（トウキョウトガリネズミ）は、北米のアラスカからノルウェーまでの北極圏を含む北方圏に広く分布する、真無盲腸目（モグラやハリネズミの仲間）の世界最小の哺乳類です。しかし、その生態や行動はよく知られていません。本種は日本では北海道にのみ生息しており、絶滅危惧種のためほとんど一般の目に触れるこ

とがないものでした。

12月2日（土）から24日（日）までの22日間、総合博物館1階の北極圏展示室において、生体展示「小さな小さなホ乳類 トウキョウトガリネズミ」と題して、チビトガリネズミとオオアシトガリネズミを、一般市民を対象に生体展示するとともに、今までに解明された生態や進化の一端を講演やパネ

ルで紹介しました。期間中の入館者数は8,931人で、関連公開セミナーは3日（日）に開催し、約70人の参加者がありました。この貴重な動物の将来の研究と保護への理解を促すという主旨を、多くの来館者の方に伝えることができました。

（総合博物館）

【公開セミナー】 12月3日（日）13:30～15:00

「えっ、トガリネズミってネズミじゃないの？」 大館智志（低温科学研究所・助教、総合博物館・資料部研究員）
「トウキョウトガリネズミが私たちに語ること」 河原 淳（環境省・希少野生動植物保存推進員）

【展示解説ツアー】 12月3日（日）15:30～16:30、12月16日（土）14:00～15:00

解説者：河原 淳（環境省・希少野生動植物保存推進員）



飼育ケースの中を元気に走り回るトウキョウトガリネズミ



お食事の時間

北海道大学病院で「第57回ふれあいコンサート クリスマスの夕べ」を実施

北海道大学病院では12月13日（水）、「第57回ふれあいコンサート クリスマスの夕べ」を開催しました。毎年、患者サービス推進委員会が中心となって色々な企画をしており、今年も会場の病院アメニティホールには、電飾が施された高さ3mの特大クリスマスツリーや空気で膨らませたエアサンタが飾られ、見慣れた風景が華やかに彩られました。

寶金清博病院長の挨拶で開会し、続いてソプラノ歌手の谷地聡子氏による歌唱（ピアノ演奏：石原優香氏）、札幌ジュニアジャズスクールによるジャズ演奏が披露されました。定番のクリスマスソングが演奏される中、会場全体で「きよしこの夜」を合唱するなど、会場にはクリスマスの雰囲気が満ちあふれました。

演奏の合間には北海道日本ハムファイターズ選手のサイン入り色紙等を景品としたお楽しみ抽選会が、演奏終了後には子ども達へのプレゼント配付が行われ、多くの子ども達の笑顔が見られました。

コンサートは佐藤ひとみ看護部長の挨拶で幕を閉じました。職員らによる手作りのクリスマスコンサートは、訪

れた人々の心に温かな思い出を残したことでしょう。

（北海道大学病院）



開会の挨拶をする寶金病院長



谷地氏によるソプラノ歌唱



札幌ジュニアジャズスクールの演奏



佐藤看護部長による閉会の挨拶

北海道大学病院が夕張市市民公開講座を開催

北海道大学病院は12月17日（日）、夕張市老人福祉会館において、夕張市市民公開講座「市民のための生活習慣病講座」を開催しました（共催：夕張市、後援：夕張市医師会）。

本公開講座は、鈴木直道夕張市長、中條俊博夕張市医師会会長、寶金清博病院長からの挨拶で開会し、「糖尿病という病気を今一度考えてみる」のテーマで中村昭伸助教（内科Ⅱ）が、「脳梗塞治療の一大革命～時は脳なり～」のテーマで長内俊也助教（脳神経外科）がそれぞれ講演を行いました。

本院と夕張市との間では、9月に「住民の健康増進に関する連携協定」を締結しており、その一環として開催した本公開講座でしたが、120名を超

える夕張市民が参加し、盛会のうちに終了しました。

（北海道大学病院）



公開講座後の記念撮影

北極域研究センターが第4回北極域オープンセミナーを開催

12月14日（木）に、TKPガーデンシティ PREMIUM京橋ホールにて第4回北極域オープンセミナーを開催しました。

本セミナーは北極域研究共同推進拠点*の主催で、北極域における温暖化等の環境変動の進行や、非北極圏諸国も含めた国家間の新たな関係性、エネルギーをはじめとする資源開発や海運ネットワークなどの経済的利用について国際的な議論の高まりを受け、企業や官公庁の方々へ北極域の最新情報を提供すると共に、新規参入を喚起することを目的として実施されています。

今回は「北極域をめぐる経済開発と国際的ガバナンスの動向」をテーマに、北極域をめぐる経済の構造的変化、国際法、国家間の関係、各国の北極政策動向に関する6つの講義が行わ

れ、企業、官公庁、研究機関等から65名が参加し盛況となりました。

セミナー終了後には意見交換会が開催され、活発な質疑応答や議論が展開され、業種を超えた交流が行われました。

◆第1～4回北極域オープンセミナープログラム集

<http://j-arcnet.arc.hokudai.ac.jp/news/21491/>

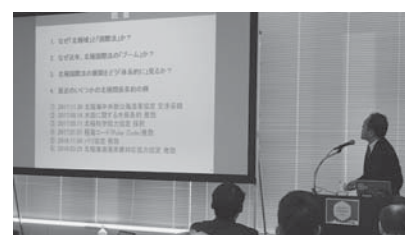


講演「北極をめぐる国際情勢と我が国の対応」

*北極域研究共同推進拠点

北極域研究センター、国立極地研究所国際北極環境研究センター、海洋研究開発機構北極環境変動総合研究センターの3機関による連携ネットワーク型の共同利用・共同研究拠点。

（北極域研究センター）



講演「北極域に係る国際法制度の現状と課題、展望」

北極域研究推進プロジェクト（ArCS）の国際シンポジウムを開催

12月11日（月）・12日（火）に、百年記念会館で国際シンポジウム「北極域の環境・開発・国際関係（International Symposium on Environment, Development and International Relations in the Arctic）」を開催しました。本シンポジウムは、北極域研究推進プロジェクト（ArCS）が主催し、本学スラブ・ユーラシア研究センターと北極域研究センターの共催で行われました。

ArCSは、文部科学省の補助事業として実施されている、我が国における北極研究の基盤プロジェクトです。その実施メニューの一つ、テーマ7「北極の人間と社会：持続的発展の可能性」の推進する研究事業の三本柱：①北極域の経済開発、②環境と人間のインタラクション、③北極域のガバナンスの各トピックに対応する形で、本シンポジウムのプログラムが構成され、産官学の代表者がそれぞれの視点

から意見を出し合い、北極域の問題に具体的に関与していくには何が必要か明確にすることを目的として企画されました。

シンポジウム冒頭で、井出敬二北極担当大使による基調講演が行われ、北極の国際統治で日本に期待されている役割と、日本における北極政策の路線が示されました。続く第1セッションでは、北極域における近年の国際関係の動向について、国際協調と軍事政策の視点からそれぞれアプローチする報告がなされました。第2セッションで

は、石油資源開発、文化人類学、政治学の各専門家が、ロシア極北のヤマル半島をめぐる資源開発の現状と、先住民の生活環境を含む環境保全のあり方について、それぞれ異なる視点から議論を行いました。2日目の第3セッションでは、北米とシベリアをフィールドとする文化人類学者が報告を行い、人新世の時代における生物多様性、人間と動物の共生、さらに科学知と在来知の共働性について意見が交わされました。

2日間を通じて62名（延べ92名）に



井出北極担当大使による基調講演



ディスカッションの様子

及ぶ参加者の中には、学術研究者のみならず政策決定者、産業界の事業関係者が含まれ、異なる分野で活動する者同士が、それぞれの視点から北極に関する共通のテーマについて意見を交わすことによって、単なる学際的な学術

交流ではなく、よりプラクティカルな次元に踏み込んだ議論が可能となりました。さらにそこから反省的に捉え返すことで、異なる次元を結び、相互理解のための道筋をつけるという、本事業において人文社会科学の研究者に期

待されている役割について、より明確なビジョンが得られました。

(スラブ・ユーラシア研究センター、
北極域研究センター)

突発災害防災・減災共同プロジェクト拠点が地域を守る防災技術者のリカレント教育に講師を派遣

防災に関する文理融合組織である本学突発災害防災・減災共同プロジェクト拠点では、11月30日（木）に地域を守る防災技術者のリカレント教育の一環として、北海道建設部が実施する「建設技術職員（中堅職員）研修」への講師の派遣を行いました。林真一郎農学研究院特任助教が「土砂災害から見た我が国の脆弱性」と題し、土砂災害対策の変遷、災害対応を行う上で留意すべき土砂移動現象の特徴、平成28年8月の台風豪雨災害の調査・分析結果等について講演を行いました。講師派遣の取組は3月から開始され、北海道水産林務部治山課の実施する研修に

対し、土砂災害（小山内信智農学研究院特任教授）、火山災害（村上 亮理学研究院附属地震火山研究観測センター教授）を専門とする講師の派遣を行っています。また、一般財団法人北海道開発協会が民間建設技術者向けに開催する「平成29年度建設事業専門研修会」にも講師派遣を行う予定であり、官民間問わず、本学の研究者が有する専門性の高い防災・減災に関する知見を提供することにより、今後も、防災関係機関と連携し、地域を守る防災技術者のリカレント教育を進め、地域防災力の向上への貢献を図って参ります。

これらの取組は、農学研究院と北海道農政部・水産林務部との農林分野の

連携と協力に関する覚書、及び北海道建設部との砂防分野の連携と協力に関する覚書に基づいて実施しています。

(農学院・農学研究院・農学部)



林特任助教による講演

■ 博士学位記授与

12月25日（月）に本学大学院研究科等の所定の課程を修了した課程博士は28人、及び本学に学位論文を提出してその審査、試験等に合格した論文博士は5人でした。なお、被授与者の氏名と論文題目等は次のとおりです。

(学務部学務企画課)

課程博士

博士の専攻 分野の名称	博士の学位を授与された者			博 士 論 文 名	
	氏 名				
博士（学術）	はっ 服	とり 部	みち 倫	たか 卓	ロシア・ウクライナ・ベラルーシの通商・産業比較－地政学危機の中の経済利害－ 主査：教授 田畑 伸一郎
博士（文学）	ヨ 余		ジン 迅		視覚と近代中国文学者－横断する幻燈・絵画・映画 主査：教授 応 雄
博士（法学）	ソ 蘇		コウ 航		中国における弁護士像と法システムの相互関係－弁護士に対する統制体制を中心に 主査：教授 尾崎 一郎
	チョウ 張	シ 子	ゲン 弦		経営者の倒産責任に関する日仏比較研究－再建型倒産手続の実効性向上を目指して－ 主査：教授 町村 泰貴
	トウ 湯		フ 武		民国後期地方政府の近代化建設研究－福建省と台湾省における陳儀の施政について－ 主査：教授 遠藤 乾
	はし 橋	や 谷	しゅう 俊		著作物等の写り込みと些少な侵害に関する一考察：アメリカ法における位置づけを手がかりとして 主査：教授 田村 善之
博士（医学）	あい 相	かわ 川	ただ 忠	お 夫	左室収縮が保持された心不全における ¹¹ C-hydroxyephedrine PETで評価した心臓交感神経分布に関する研究 主査：教授 松居 喜郎
	きた 北	い 井	ひで 秀	のり 典	KRAS変異肺癌における上皮間葉移行に基づいたMEK阻害薬による受容体型チロシンキナーゼのフィードバック機構に関する研究 主査：教授 野口 昌幸
	こ 小	ばやし 林	かず 一	や 哉	CTを用いた局所心内膜変形の定量解析 主査：准教授 中村 幸志
	さ 佐	とう 藤	だい 大	すけ 介	膀胱の間質における癌関連線維芽細胞マーカーの発現状況と臨床病理学的因子の関連に関する研究 主査：教授 近藤 亨
	しも 下	の 埜	じょう 城	じ 嗣	脾臓原発びまん性大細胞型B細胞性リンパ腫の臨床病理学的検討に関する研究 主査：教授 佐藤 典宏
	とよ 豊	なが 永	え 愛	れん 恋	線状IgA水疱性皮膚症自己抗体が標的とするXVII型コラーゲンの抗原エピトープ出現機序 主査：教授 石田 晋
	やなぎ 柳	だ 田	さ 早	おり 織	痙攣性発声障害における定量的発話評価に関する研究 主査：教授 生駒 一憲
	わた 渡	なべ 邊	み 美	か 佳	17型コラーゲンは毛包間表皮の増殖を制御する 主査：教授 岩永 敏彦
博士（獣医学）	まえ 前	かわ 川	なお 直	や 也	Studies on immune checkpoint molecules in canine cancers and development of a novel immunotherapy targeting these molecules （イヌ腫瘍における免疫チェックポイント分子の解析とそれらを標的とした新規免疫療法の検討） 主査：教授 大橋 和彦
博士（情報科学）	よし 吉	なり 成	のぼる 昇		産業廃棄物処理事業における平常時の搬入運搬車両の挙動解析と災害時の災害廃棄物量推定に関する研究 主査：教授 山本 雅人
博士（工学）	た 田	じま 島	あき 章	お 雄	量子セキュアネットワークの研究 主査：教授 本村 真人

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者	博 士 論 文 名
	氏 名	
博士（情報科学）	カク 郭 ケイ 景 シュン 春	Plasmon-induced photoelectrochemical biosensors using gold nanostructured titanium dioxide photoelectrodes (金ナノ構造担持酸化チタン電極を用いた光電気化学バイオセンサー) 主査：教授 三澤 弘明
	ジョージ George ムフングルワ Mufungulwa	A Study on Robust Speech Recognition with Time Varying Speech Features (音声の時変特徴量を用いた雑音ロバスト音声認識に関する研究) 主査：教授 宮永 喜一
博士（水産科学）	カン 亢 シー 世 ファ 華	Comparative morphology and phylogenetic relationships of the family Polynemidae (Pisces: Perciformes) (ツバメコノシロ科魚類の比較形態学および系統類縁関係に関する研究) 主査：教授 今村 央
博士（環境科学）	レイチュール ウソン Rachael Uson ロペス Lopez	The beneficial effects of melinjo (<i>Gnetum gnemon</i> L.) seed extracts on vasolidation and cancer cell proliferation (メリンジョ(<i>Gnetum gnemon</i> L.)種子抽出物が血管拡張および癌細胞増殖に及ぼす有益な効果) 主査：准教授 藏崎 正明
	ほそ 細 かわ 川 な な え 枝	Role of root litter on soil nitrogen transformations under winter climate change in forest ecosystems (冬季気候変動下における森林生態系の土壌窒素変換に根リターが果たす役割) 主査：教授 柴田 英昭
	ほり 堀 はる 晴 な 菜	Studies on multielectron-transfer mechanism in photocatalytic oxygen reduction by flake ball-shaped bismuth-tungstate particles (フレークボール形状タングステン酸ビスマス粒子による光触媒酸素還元反応における多電子移動機構に関する研究) 主査：教授 大谷 文章
博士（農学）	いさ 儀 だ 田 れい 玲 か 華	Comparative studies on soil microbial community structures and their function in boreal and subarctic ecosystems (北方林およびツンドラ生態系における土壌微生物群集とそれらの機能性についての比較研究) 主査：教授 橋床 泰之
	しん 進 どう 藤 そう 惣 じ 治	農村地域資源の有効利用と保全管理に向けた合意形成手法に関する研究 主査：教授 井上 京
博士（生命科学）	チン 陳 ミン 明 ハオ 皓	Elucidation of a novel tRNA thiolation reaction mechanism involving Fe-S cluster (鉄硫黄クラスターが関与する新規tRNA硫黄転移機構の解明) 主査：教授 姚 閔
	ハリー マリエット Halley Mariet メニゼス Menezes	Driving and photo-regulation of myosin-actin motor at molecular and macroscopic level by photo-responsive high energy molecules (光応答性高エネルギー分子による分子およびマクロレベルでのミオシン-アクチンモーターの駆動と光制御) 主査：教授 玉置 信之
博士（工学）	かい 海 とう 藤 よし 義 ひこ 彦	携帯電話用ガラスパネルに関する動力学的研究 主査：准教授 本田 真也

論文博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者	博 士 論 文 名
	氏 名	
博士（医学）	まさ 正 き 木 ゆ き こ 悠紀子	2-nitroimidazole系低酸素イメージング剤の腫瘍内低酸素領域への集積メカニズムに関する研究 主査：准教授 志賀 哲
博士（水産科学）	やま 山 もと 本 けい こ 圭 吾	大阪湾における麻痺性貝毒原因藻 <i>Alexandrium tamarense</i> の大規模増殖および二枚貝の毒化に関する生物環境学的研究 主査：教授 今村 央

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者	博 士 論 文 名
	氏 名	
博士（環境科学）	しま だ う だい 嶋 田 宇 大	An observational study of tropical cyclone intensity estimation, intensity change processes, and intensity forecast (熱帯低気圧の強度推定, 強度変化プロセス及び強度予報に関する観測的研究) 主査：准教授 堀之内 武
	なか し ま ひ と し 中 島 均	Evaluation of the hazard of light emitted during arc welding (アーク溶接時に放射される光の有害性の評価) 主査：特任教授 田中 俊逸
博士（生命科学）	い そ べ し ん や 磯 部 真 也	ヘテロクロマチンタンパク質HP1との新規結合因子SCAIとAHDC1の解析 主査：教授 姚 閔

■ 諸会議の開催状況

役員会（平成29年12月11日）

議 案・教育組織の設置に関する基本方針について

- ・平成31年度概算要求の基本方針について

協議事項・多様な財源による教員の雇用制度について

- ・北海道大学入学式（学士課程）の実施日について

報告事項・平成28年度に係る業務の実績に関する評価の結果について

- ・平成29年度財政状況及び第3期中期目標期間の財政見通しについて
- ・平成29年人事院給与勧告等について
- ・障害者の雇用状況等について

教育研究評議会（平成29年12月20日）

議 題・北海道大学入学式（学士課程）の実施日について

報告事項・教育組織の設置に関する基本方針について

- ・多様な財源による教員の雇用制度について
- ・平成28年度に係る業務の実績に関する評価の結果について
- ・平成31年度概算要求の基本方針について

役員会（平成29年12月25日）

議 案・北海道大学入学式（学士課程）の実施日について

- ・クロスアポイントメントの適用について

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しています。

■ 学内規程

国立大学法人北海道大学創成研究機構グローバルファシリティセンター分析・加工受託規程の一部を改正する規程

(平成30年1月1日海大達第1号)

創成研究機構グローバルファシリティセンターにおいて、材料加工に使用する設備の削除を行うことに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学病院特定臨床研究監査委員会規程の一部を改正する規程

(平成30年1月1日海大達第2号)

北海道大学病院特定臨床研究監査委員会について臨時で開催できることとしたこと及び委員会の監査結果の取扱いを改めることに伴い、所要の改正を行ったものです。

北海道大学学生相談室規程の一部を改正する規程

(平成30年1月1日海大達第3号)

学生相談室の副室長及び相談員を委嘱することができる者の対象を拡大することに伴い、所要の改正を行ったものです。

北海道大学特別修学支援室規程の一部を改正する規程

(平成30年1月1日海大達第4号)

特別修学支援室に副室長を置くこと及び相談員を委嘱することができる者の対象を拡大することに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学オープンファシリティ使用規程の一部を改正する規程

(平成30年1月1日海大達第5号)

本学のオープンファシリティについて、設備の追加及び削除を行うことに伴い、所要の改正を行ったものです。

北海道大学低温科学研究所規程の一部を改正する規程

(平成30年1月1日海大達第6号)

平成30年1月1日付けで、低温科学研究所の生物環境部門に研究分野を新設することに伴い、所要の改正を行ったものです。

■ 研修

研修名：平成29年度北海道地区国立大学法人等係長研修

開催期間：平成29年12月13日～15日

開催場所：百年記念会館大会議室

研修目的：北海道地区国立大学法人等の係長及び係長相当の職にある者に対して，その職務遂行に必要な基本的，一般的知識を習得させるとともに，係長としての能力及び識見を確立させ，国立大学法人等の管理運営の重要な担い手としての職員の資質向上を図ることを目的とする。



特別講話(小樽商科大学事務局長 関 昭裕氏)



講義・グループワーク(株式会社アムリブラザ)



研修風景

(総務企画部人事課)

研修名：平成29年度北海道地区国立大学法人等学生支援担当職員SD研修

開催期間：平成29年12月14日・15日

開催場所：工学部フロンティア応用科学研究棟2階セミナー室

研修目的：学生指導，学生支援及び学生サービス業務を円滑かつ適正に行うために必要な基本的知識，対応能力等を習得することにより，学生支援担当職員としての能力の向上を図ることを目的とする。



出口寿久学務部長の挨拶



研修の様子

(学務部学生支援課)

■表敬訪問

海外

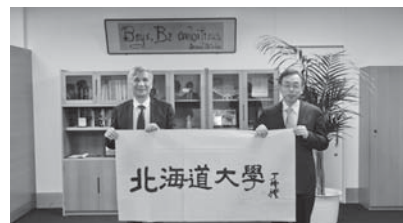
年月日	来 訪 者	来 訪 目 的
29.11.30	ケンブリッジ大学 Matthew Gaunt 教授, Astex社 Tom Heightman 博士, David Rees チーフサイエンティフィックオフィサー	両大学の交流に関する懇談
29.12.1	駐日ナイジェリア大使館 Mohammed Gana Yisa 大使	両国の交流に関する懇談
29.12.12	中国科学院大学 (中国) Ding Zhongli 学長	両大学の交流に関する懇談



ケンブリッジ大学 Matthew Gaunt 教授(中央), Astex社 Tom Heightman 博士 (中央右), David Rees チーフサイエンティフィックオフィサー (右から4人目)



駐日ナイジェリア大使館 Mohammed Gana Yisa 大使 (中央左)



中国科学院大学(中国) Ding Zhongli 学長(左側)

(国際部国際連携課)

■人事

平成30年1月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【教授】 低温科学研究所教授 国際連携研究教育局教授 国際連携研究教育局教授 国際連携研究教育局教授 国際連携研究教育局・大学院情報科学研究科教授	山 口 良 文 DUTKIEWICZ ERYK HUANG XIAOJING LIU REN PING 吉 岡 真 治	東京大学大学院薬学系研究科准教授 採用 採用 採用 国際連携研究教育局・大学院情報科学研究科准教授

新任教授紹介

平成30年1月1日付



低温科学研究所教授に

やまぐち よしふみ
山口 良文 氏

生物環境部門
冬眠代謝生理発達分野

最終学歴

京都大学大学院生命科学研究科博士後期課程修了(平成17年3月)
博士(生命科学)(京都大学)

専門分野

分子発生生理学



国際連携研究教育局教授に

エリック デュトキエヴィッチ
Eryk Dutkiewicz 氏

ビッグデータ・サイバーセキュリティグローバル
ステーション シドニー工科大学ユニット

生年月日

1964年3月16日

最終学歴

豪州 ウーロンゴン大学電子情報通信工学研究科博士課程修了(1996年8月)

専門分野

次世代無線通信網のための動的スペクトル管理,
無線ボディアエリアネットワーク



国際連携研究教育局教授に

シャオジン ホアン
Xiaojing Huang 氏

ビッグデータ・サイバーセキュリティグローバル
ステーション シドニー工科大学ユニット

生年月日

1963年10月3日

最終学歴

中国 上海交通大学電子工学研究科博士課程修了(1989年1月)

専門分野

超高速混合信号処理技術, 全二重無線通信,
高集積ハイブリッドミリ波アンテナアレイ



国際連携研究教育局教授に

レン ピン リウ
Ren Ping Liu 氏

ビッグデータ・サイバーセキュリティグローバル
ステーション シドニー工科大学ユニット

生年月日

1963年10月18日

最終学歴

豪州 ニューキャッスル大学電気工学科博士課程修了(1996年3月)

専門分野

ワイヤレスネットワーク, サイバーセキュリティ



情報科学研究科教授に

よしおか まさはる
吉岡 真治 氏

情報理工学専攻
知識ソフトウェア科学講座

生年月日

昭和44年2月10日

最終学歴

東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(平成8年3月)
博士(工学)(東京大学)

専門分野

知識工学, 情報検索

訃報

名誉教授 なかじ たかひこ 中路 貴彦 氏
(享年73歳)



名誉教授 中路貴彦先生が平成29年11月18日に逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

中路先生は、昭和19年6月に満州（中国東北部）でお生まれになりました。昭和43年3月に北海道大学理学部数学科を卒業された後、北海道弟子屈高等学校教諭を経て、同48年4月に北海道大学応用電気研究所に助手として採用されました。同研究所・講師、助教授を経て、昭和59年6月に北海道大学理学部数学科応用数理講座助教授に就任、平成3年7月に教授に昇任され、同7年4月には理学研究科数学専

攻教授、同18年4月には理学研究院数学部門教授になられました。平成20年3月に定年退職され、北海道大学名誉教授の称号を授与されました。その間、昭和52年12月には北海道大学より理学博士の学位を授与されています。

中路先生のご専門は解析学、特に関数環やハーディ族、及びそれらに関する線形作用素の研究です。その内容は多岐にわたりますが、単位開円板上の有界正則関数環を抽象化した弱スター・ディリクレ環、ハーディ族の線形汎関数に関する極値問題、スペクトルの過去や未来の部分的データから現在を予測する予測理論、作用素・関数環や特異積分作用素に関する研究はよく知られています。先生はこれらのご研究を140編を超える論文として発表されました。平成20年に朝倉書店より、解析学百科Ⅰ「古典調和解析」（共著）、同21年に岩波書店より、岩波数学叢書「正則関数のなすヒルベルト空間」（単著）を出版されています。

中路先生は国内外の国際研究集会において多数の研究発表を行うとともに、

研究集会「関数空間セミナー」を長年にわたり主催され、この分野の研究をリードしてこられました。中路研究室からは多くの研究者が輩出しています。また、教育・学生指導にも熱心で、多くの学生に慕われてきました。

1年次クラス担任をされた際には、大学祭に中路先生の名前を冠した模擬店が出店されたほどです。また、各種委員を歴任して大学・教室の運営、発展に貢献してこられました。特に数学教室においては長く就職担当を務め、学生の就職相談、就職情報の収集に尽力されました。

中路先生の数学に対する情熱はご定年後も全く衰えることはありませんでした。平成29年11月17日には「作用素論・作用素環論研究集会2017」で講演されました。誠に残念ですが、その翌日にご病気で急逝されました。

先生の長年にわたるご貢献に改めて感謝し、ここに謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(理学院・理学研究院・理学部)

名誉教授 ^{たなか としみつ} 田中 利光 氏
(享年82歳)



名誉教授 田中利光氏が平成29年11月26日に逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、昭和10年6月8日東京都に生まれ、同33年3月東京大学文学部卒業、同年4月同大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程へ入学、同39年3月同博士課程単位取得退学、同年4月国際基督教大学語学科助手に任命され、翌40年4月北海道大学文学部講師に着任し、同45年助教授に昇任、同56

年言語文化学部教授に就任され、平成11年3月定年により退職、同年4月に北海道大学名誉教授の称号を授与されました。その後、平成12年4月より同18年3月まで北星学園大学にて教授を務められ、同27年11月には瑞宝中綬章を受章されました。

先生は、昭和40年4月から34年の長きにわたって本学教養部、後に言語文化学部において古典ギリシャ語とラテン語の授業を担当され、文学部において同41年4月から言語比較方法の授業を、また大学院文学研究科の言語学演習をも併せて担当されました。

先生の研究分野は、主にギリシャ語学、一般言語学、言語学史の3領域にわたり、ギリシャ語学については、音韻論、形態論等の広範な領域に及び、言語学の基本的・一般的な諸問題、即ち形態素分析、ソシュールと変形文法の関係、言語学的意味論、音韻変化等、更に言語学史にも研究を深めら

れ、ジョーンズ、シュレーゲルの学説に再検討を加えると共に、ソシュールと変形文法に関する論考は言語学史に関する国際的な専門誌に掲載されています。また、『ラテン語初歩』（岩波書店）、『新ギリシャ語入門』（大修館書店）を著されています。以上のように先生は、古典語、言語学両面において研究、教育に貢献されました。

学内の公務では、教養部において学生委員会委員等、大学紛争時期には問題検討委員会委員を、また言語文化学部では、人事委員会委員、将来計画委員会委員等を務められました。

先生の長年にわたるご貢献に感謝し、謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(国際広報メディア・観光学院、
メディア・コミュニケーション研究院)

名誉教授 ^{たかはし ただよし} 高橋 忠義 氏
(享年92歳)



名誉教授 高橋忠義先生が平成29年12月20日に逝去されました。

先生は、昭和20年9月に東京物理学校を卒業され、教職に就かれた後、北海道大学に入学、同28年3月に工学部を卒業されました。その後、昭和28年4月工学部助手、同37年4月助教授、同44年4月教授に昇任され、平成元年3月に定年退職されました。定年退職後は、新日本製鉄株式会社室蘭技研及び株式会社日本製鋼所技術顧問として

技術者の指導にあたられました。

教育面では、鉄鋼材料学、相変態、金属工学特論などを講義され、多数の卒業、修士、博士論文を指導されました。学内では、工学部附属金属化学研究施設長などを、学外では、文部省学術審議会専門委員、名古屋大学、九州大学等で非常勤講師などを務められました。また、中国からの招聘により、北京科技大学で中国全土から選抜された研究者・技術者に集中講義を行われるなど、教育活動に貢献されました。

研究面では、金属の凝固研究の黎明期から現象解明に尽力されました。特に、固液共存層を「凝固遷移層」と呼称し、その実態を明らかにしたことは、当時日本が鉄鋼生産量を飛躍的に増大させるために導入していた、連続鋳造技術の発展に大きく寄与されました。

学外にあっては、日本学術振興会製

鋼第19委員会委員及び同凝固現象協議会の主査として国内の凝固研究を先導され、それらの研究成果に対し、日本鉄鋼協会及び日本金属学会から論文賞及び谷川・ハリス賞を、平成元年2月には、北海道から北海道科学技術賞を授与されました。また、日本鉄鋼協会理事、日本金属学会理事、同北海道支部長、両学会合同の全国大会組織委員長を務められるなど、学会活動にも尽力されました。

これらの顕著な教育研究功勞により、平成17年11月には瑞宝中綬章を授与され、さらに、日本鉄鋼協会名誉会員及び日本金属学会名誉員となりました。

先生の長年にわたるご貢献に改めて深く感謝し、謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(工学院・工学研究院・工学部)

編集メモ

● 1月下旬から真冬日が続き、冬の寒さもいよいよ本格的になってきました。

● 受験シーズンを迎え、1月13日（土）・14日（日）には、大学入試センター試験が本学でも実施されました。全国では、雪で試験に影響が出た会場もありましたが、札幌では、寒さは厳しかったですものの、それほど雪も降らず、混乱もなく無事終了しました。





2018.1.6 札幌市電（外回り） 狸小路～すすきの（札幌市）

北の鉄道風景 58 札幌市電

1918年に民営の札幌電気軌道として開業し、1927年の市営化を経て現在に至る札幌市電。その最盛期には、札幌市内の各地を結ぶ総延長25kmほどの路線を有していたが、1970年代に地下鉄の開通などを理由とした路線縮小が進められた。その結果、西4丁目停留場を始点、すすきの停留場を終点とする延長8.5kmの路線だけが残された。その後、両停留場間を結ぶ複線を新設し、環状路線とすることで利便性

向上を目指す機運が高まり、2015年12月にループ化路線での循環運行が始まった。写真はループ化で新設された区間を往く冬季間限定の「雪ミク電車」だ。ループ化によって、この写真のように、電飾を背景に駆ける電車が見られるようになった。

情報科学研究科 准教授 山本 学

北大時報 ① No.766 平成30年1月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail: kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。 <https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>